

# 『ハートカッター』

Heart Cutter by Suzuki Gosuke

鈴木剛介 著

[Heart Cutter/May.] 2015/08/12 最終改訂

『ハートメイカー』執筆の引き金となった、歴史上、類書が存在しない「愛」の物語。

「ノブ、わたし、ノブの夢を壊してはいけないと思ったし、100%の断言は出来ないから黙っていようと思ったのだけど」

と、みなみは言った。心臓の鼓動のリズムが一瞬、狂う。

「うん、何でも言っていていいよ。大丈夫。だって家族だろう？ おれたち」

「気を悪くしないで約束してくれる？」

「大丈夫だよ、伊達にトシ食ってない」

私は心の中でガードを上げ、ファイティングポーズを取った。

セブイレブンで買ったカフェオレのミニボトルのキャップを開け、すっぴんの顔でそれを一口飲むと、みなみはわたしの眼を見て言う。

「断言は出来ないけど、それ、営業の可能性が大きいと思う」

深夜2時の路上。私は自転車を押すのを止め、立ち止まった。

ジェットコースターに乗るように展開した、りのとの、このたった1ヶ月の関係のことを思い出していた。思い出していたというより、彼女との記憶が脳内に秒速でフラッシュバックする。

「営業だと考えたことはあった？」

「だって彼女には1円も使っていないんだぜ」

「だとしても」

みなみの顔立ちは可愛いが、すっぴんだととても顔色が悪く見える。でも仕方ない。と思う。ハードな仕事なのだ。心を、ハートを切り売りし、すり減らしてお金を稼ぐことは、もしかしたら身体を売るよりも過酷な商売なのではないかと思うこともある。

立ち止まった私の手を、みなみが優しく握る。私はみなみの眼を見て言う。

「営業かもしれないという可能性もちろん忘れたことはないよ。でも、そこまで出来るのか？ あれがすべてテクニカルに作った虚構の言葉だとしたら、どんな作家も太刀打ち出来ない才能と思う。真剣に」

「プロなら出来るのよ。なぜなら、そこまで来ると、本人も嘘か本当か自分で分からなくなっているから」

「うん」

「ごめんね。もちろん、りのちゃんがノブに100%本気だという可能性もあると思うけど」

「でも、そんなことを言ったら、みなみのことだって疑おうと思えば疑える」

「そう。たとえ身体を許したって、個人情報を教えたって、わたしたちが本当のことを言っているかどうか保証はない。だって言葉って、その程度のものでしょうか。所詮、言葉なんて。だけど言動にはすべてが現れる」

「言動？」

「そう。言葉はいくらでも作れるし飾れるけど、行動は事実。たとえば信夫は、わたしのために、わざわざ今日、こうして出て来てくれた。そういうことは事実として信じる事が出来る」

「本当に2万円でもいいの？」

「ごめんね。本当に、そんなつもりじゃなかったのだけど」

「いいよ、家族なんだから。出来ることはするし、出来ないことはしない」

「ありがとう。本当に、いつも」

「いや、その代わり今度、おれが困っている時は助けて」

「もちろん。ねえ、りのちゃんとは別れるの？」

「分からないけど、言ってもらって良かったと思う」

みなみは、つないでいた手を大きく振った。身長153センチのみなみが身長185センチの私の顔を見上げ、言う。

「もえちゃんとは、今でも会ってるの？」

「う……ん、どうかな？」

「上西大学だっけ」

「うん。哲学科の後輩。今、1年生」

「小林りのちゃんは？」

「国陽大学の3年生」

と、私は答える。

「ノブ、女子大生キラーだね」

みなみが、いつもの皮肉な笑みを浮かべる。

「逆だろう」

慌てて言葉を返す。

「女子大生に心を弄ばれる、冴えない43歳のおやじ」

「まあ、そこはあえて否定しないけれどね」

みなみは言うのと立ち止まり、肩にかけていたエコバッグからビニールの袋を取り出した。

「これ。この前、表参道に行った時のお土産」

「何？」

「前に話していた『スター・ウォーズ』のTシャツ」

「あ、ああ、ありがとう」

その袋を受け取り、しばし重さを手で確かめた後、リュックにしまう。

「どうする？ 上がって、お茶飲んでから帰る？」

「いや、今日はもう帰る。みなみも明日、朝から仕事だろう？」

「うん。そだね。もう寝なくちゃ」

「ぎゅう、しよう、みなみ」

ダウンジャケットを着た腕で、みなみの小さな頭を抱える。みなみは右の頬を私の胸に押し付ける。

「大丈夫、みなみは、ちゃんと幸せになれる」

「うん」

みなみのマンションの前、私たちはすぐに身体を離れた。

「12月23日のバスデー、来られる？」

「分からない。行けそうなら、連絡する。25だよね」

「そう、お店では23歳だけど、リアルでは25。実はへこんでる」

苦笑し、言った。

「出来ることはするし、出来ないことはしない」

「分かってる。ありがとう、ノブ、いつも本当に」

「じゃあ」

わずかに残る未練を胸の底に押し込め、自転車にまたがって深夜の街の中へとペダルを踏んだ。角を曲がる時に振り返ると、みなみの姿はもうそこにはなかった。まるで、彼女までもが虚構の世界の住人であるかのように。

私の出身地は、藤沢周平の小説に登場する海坂（うなさか）藩のモデルと言われる山形県鶴岡市。人口は13万人。実家は、その希少価値から「まぼろしの豆」と呼ばれた「だだちゃ豆」の明治から続く市内最大の農家なので、特に金に困ったという記憶はない。

「だだちゃ豆」の「だだちゃ」とは庄内地方の方言で「おやじ」「お父さん」を意味するが、「だだちゃ」という呼称自体は現在では死語に近い。そもそもは、江戸時代、献上された枝豆に対して庄内藩の殿様が「この枝豆は、どこのだだちゃの作った豆だや？」と尋ねたことから、「だだちゃ豆」と呼ばれるようになったと言われている。

私は裕福な農家の一人息子として生まれ育ち、恵まれた体格から、高校時代に柔道で3段を取り、3年生の時に県大会で準優勝した経験もある。大学進学と同時に上京、四谷にある上西大学文学部哲学科に5年間在籍した。在学中、体育会少林寺拳法部に所属、3段の赤い「卍」（まんじ）を胸に構内を闊歩（かつぽ）していた。

今の若い人には想像も出来ないだろうけど、バブルが最後のあだ花を咲かせていた90年代初頭、空前の売り手市場の中で、一部マスコミをのぞけば、希望すればどんな企業にでも就職することは可能だった。

1年の留年の後、あまり深いことは考えずに、イメージ優先で売上高が日本で上から3番目の商社に入社し、鉄鋼畑で3年バリバリ働いた。しかし、そうした一般企業ですんなりサラリーマンの道を歩けるような人間は、そもそも哲学を志したりはしない。

27歳の時に、会社の先輩に連れていかれた渋谷の高級クラブで、たまたま客同士の喧嘩を仲裁したことからスカウトされ、哲学青年にありがちなドロップアウト志向の冒険心から、以来、夜の世界の住人になった。

人生を歩むプロセスにおいて何人かの女性と親しくはなったが、もともと、どちらかと言えば人間嫌い、他人といるよりは一人でいることを好むタイプ。何となくずるずると婚期を逃したまま、40歳の時に実家に帰省したおり、出羽三山（でわさんざん）神社に一人で観光に来ていたみなみと出会った。

当時、みなみは22歳。田舎にはいないタイプのファッションセンスの、おしゃれで可愛い女の子だな、というのが第一印象だった。

出羽三山は、修験道を中心とした山岳信仰の場。山形では有数の観光地だが、若くておしゃれな女の子が観光に来るような場所ではない。みなみのような女の子が一人で歩いていれば、嫌でも目立つ。

杉の巨木に囲まれた羽黒山の階段を、バカでかいスニーカーを引っ張り上げながら歩いていたみなみに、ひよいと手を貸したのがそもその出会いだった。

私がスニーカーを持とうとすると、最初はかたくなに遠慮していた彼女だったが、お互い柔道経験者だということが分かってから急速に打ち解け、私が「学生さんですか？」と訊いたら、あっけらかんと「キヤバ嬢」と返事が返って来た。

「キヤバ嬢が、こんなところまで何の修行をしに来たの？」と、訊くと「わたし、月読命（ツクヨミノミコト）に興味があつて」と即答され。その瞬間に、彼女の、その可愛らしい顔の裏に秘められた知性に強く興味を惹かれた。

さらに話してみれば、私も彼女も職場は主に渋谷。かつ彼女もまた、特定の店に所属しない「派遣」の身。互いの似たような境遇に共感し、肉関係こそないが、精神的に深いつながりを持つに至るまで、それほど時間はかからなかった。

最初の出会いの後、東京に戻って、六本木の『ブルーバレンタイン』という無国籍レストランでデートした。

詳しく聞いてみると、彼女はいわゆる「歴女」。ただし、彼女の関心領域は主に『古事記』や『日本書記』で、中退するまで大学で専攻していたのは比較神話学だったらしい。

「月読命（ツクヨミノミコト）とか天照大神（アマテラスオオミカミ）とか、妄想すると、ちよー燃える」

みなみは、眼をキラキラさせながら日本の古代神話について熱く語った。

「よく分からない」私が言うと「だろうね」と言って、彼女も笑った。

実は日本史よりもアニメの方がもっと好きと知ったのは、それからずいぶん経ってからのこと。

まあ、どちらにせよ、知的なオタク体質であることには変わらないのだが……。

★3

小林りのから突然、携帯にメールが届いたのは約一ヶ月前、10月22日の夜だった。

桜葉さんは、わたしのこと分らないと思います。

一度、お店でお見かけして、

で、どうしてもご連絡したくて

スタッフに無理やりアドレス聞きました。

勝手なことをして、「めんなさい。

率直に要件だけ言います。

お店のこととは関係なく、

一度、会って頂けないでしょうか？

源氏名は「みそら」でやっていますが、

本名は小林リのです。

お返事、待っています。

「はっきり言って、一目惚れです」

りのは屈託なく笑う。屈託はないが、眼の底の底に委縮した不安なおびえや緊張のようなものも微かに見える。

「佐々木希に似ているね」

言うと、

「ササキキに似ているなんて言われたことない。わたし、可愛くないから」

と、うつむき、りのは中学生のように頬を赤らめた。

メールをもらって数日後の日曜日、ホテルのティールラウンジでお茶をしていた。店員に、真ん中の方の席に案内されたが、りのが拒否して窓際の人の少ない方の席に座った。私はホットコーヒー。彼女は一度アイスコーヒーを頼んだが、苦くてマズいと言ってアイスティーを注文し直した。私はコーヒーに口を付け聞く。

「何で、おれが呼ばれたのか、いまひとつ、よく分からないのだけど」

「桜葉さんて前に、お仕事で銀座の『クルーチェ』に来たことあったでしょう」

「うん。『クルーチェ』には確かに仕事でたまに行く」

「ちらっと見て、あ、この人だ。と思ったの。理由はそれだけ」

「それだけ？」

「そう。それだけ。でも、わたし、そういう直感ってすごく大事にするし、直感を一番信じてる。理屈で考えたことよりも、直感の方が往々にして正しいことが多いから」

タバコを止めて、ずいぶん経つので、タバコが恋しいと思うことはもうないが、タバコ



が必要なシチュエーションというのは、やはりたまにある。

「率直に言って、それは、おれが好き、ということ？」

「だから言ってるじゃない。一目惚れしたの」

「一応言っておくけど営業かけても無駄だよ。おれだって知らない世界じゃないから」

「わたしだってその世界の女だから、お金がある人か、ない人かは見れば分かる。桜葉さんみたいに『細い』男に仕事で手間暇かけるほど、お客さんに困ってない」

「よく分からない。こんなおっさんのどこがいいの？」

「そーゆー子、多いけど、わたしも若い男は嫌い」

この女の子は、まあ、モテるだろうな、と思う。はっきりした特徴のある顔ではないが、これ以上はないほどに整った目鼻立ち。流行よりも少し抑え目な上品なメイク。滑らかに輝く髪。そして本人の語るところによれば『アラン&チューリング』という、淡いピンクを基調とした高級ブランドで統一したファッション。

どこまでが素で、どこまでが演出なのかまでは分からないが、小林りのは明らかに男が好むタイプの理想的な女として私の目の前にいた。

おれのが好き？

私は彼女の言葉を、どうとらえれば良いのか分からず、軽い、いや、決して軽くはない混乱に襲われていた。

★4

渋谷・御礼坂（おんれいざか）にある「銀河ボクシング・ジム」で2時間のトレーニングを終え、拳に巻いたバンテージを外してTシャツを着替える。ウインドブレーカーをはおり、リスト・ウォッチとiPodを装着してランニング・シューズを履く。

よく晴れ、そして冷え込みの厳しい11月終わりの午後4時。

ジムの前の歩道で足首を回しながらiPodの選曲をする。しばらく迷ってから「オービタル」を再生。iPodのランニング・ワークアウトを10キロに設定し、渋谷の街を走りはじめた。

御礼坂から表参道、青山、赤坂を抜け、永田町の国会議事堂をぐるりと回って、折り返し、ひたすら六本木通りを走って渋谷まで戻る10キロのロードワーク・コース。キロ5分のペースで消費カロリーは900。途中でウィンドブレーカーを脱いで腰に巻いても、冬場でもTシャツが汗で重くなる。

ジムに戻り、シャワーを浴び、トレーナーに挨拶して革靴を履いた。黒いスーツに蝶ネクタイを締めた制服で「銀河ボクシング・ジム」から自転車で10分の距離にある『ブランド・スラム』という店に出勤する。

まだ開店前の店に入り「こんちやうす」と挨拶すると、まだ20代の店長が「あ、桜葉さん。今日もよろしくお願ひします」と、丁寧かつ律儀に頭を下げた。

私は『ブランド・スラム』という店の所属ではなく、その親会社であるチェーン組織、「マッスル・ブラザース・アンド・カンパニー」と直接契約を結んでいる。

職業は、通称「心取り（しんとり）」。正式名称は「心身取扱い主事」。

夜の世界で働く女の子たちの心身を守り、責任を持つという名目だが、要はボディガードであり用心棒のような存在。仕事は大きく分けて3つ。酔って暴れる客の相手をする。と。極める道の方々の相手をする。そしてもう一つが、男性スタッフとお店の女の子の「風紀」に目を光らせること。

ただ、こうした本業のトラブルが日常的に発生するわけではないので、普段はボーイに紛れて、テーブルを拭いたり、グラスを下げたりしながら店内の様子に注意を払っている。

私の職場は主に「マッスル・ブラザース・アンド・カンパニー」の旗艦店舗である、この『ブランド・スラム』という大型店だが、渋谷の他に新宿や銀座のチェーン店に呼ばれて出向くこともある。

六本木と赤坂方面の店は、須藤さんというすでに50歳を過ぎた先輩が面倒を見ている。須藤さんは大学を中退してプロレスラーになり、その後、ブラジルに渡ってグレイシー柔術をマスターした変わり種。私は、柔道と少林寺拳法で3段の帯を締めた後、ボクシング・ジムに通いはじめ、一応、プロのC級ライセンスは取った。

実際に、そうした格闘技術を仕事で使うことはまずないが、その技術を買われて雇われている身分だから、トレーニングは週6日欠かさない。

1日トレーニングをさざれば1日分、頭も身体も弛緩する。常に心身を臨戦態勢にキープしておくためにも、ジムでボクシングのトレーニングをすることが半ば仕事のようなも

のだった。

給料は手取りで40万円。その内の10万円は山形に暮らす両親に仕送りしている。やはり渋谷にある部屋の家賃が12万円。酒も煙草も女遊びもしないので、金のかかる生活ではないが、それほど余裕があるわけでもない。まあ、道楽と言えば、デグーというアンデスに生息する珍しいネズミを2匹飼っていることくらい。

「ネズミ道楽」。

基本的には人間の相手をしているよりもネズミの相手をしている時の方が幸せだった。

43歳、独身。貯金はちよつと。将来の展望もなし。夢も希望もなし。家族はネズミが2匹。

「桜葉さん。今日、酒見が来るかもしれない」

店長がモップを持つ手を止め、私を見た。

「サケミ？ あー、酒見って、『GAD』の取締役の？」

「たぶん21時頃、団体で来るみたいなこと言っていました」

「いいよ。分かった」

「よろしくお願いします」

店長は茶髪に似合わない生真面目な顔で、再び率先してモップを持つ手を動かしはじめた。

★5

黒崎もえと出会ったのは、上西大学文学部哲学科ニーチェ研究会発足25周年パーティーの席だった。

一応OBである私の手元に案内葉書が届いたのが今年の夏のはじめのこと。普段なら、そのままゴミ箱行きの紙だが、ふと、不特定多数の知らない人間と顔を合わせてみたくなつた。孤独からではない。単なる気紛れ。

当日、四谷の居酒屋に集まったのは20名ほど。知った顔はなかったが、若い現役の学生が多かったので、会はそのその盛り上がりを見せていた。ニーチェはおるか、哲学の

話をしている者は一人もおらず、口にする話題は芸能ゴシップか政治家の悪口。そんな席の片隅で、居心地が悪そうに一人黙って座っていたのが黒崎もえだった。

もえとはじめて会話を交わしたのは、その居酒屋のトイレの前。

何しろ、全品一皿170円の店。トイレは男女共用で一つしかない。私が、そのトイレに入ろうとした時、後ろから腕を掴まれた。振り返ると、そこにいたのが、もえだった。

妖精みたいな女の子だな、というのが、彼女の第一印象だった。

華奢で、はかなげで、まるで夢かファンタジーの中の存在のように思えた。そして、その見た目の印象とは対照的な、毒と棘を含んだキツイ口調で彼女は言った。

「他でして」

「は？」とつさに、訊き返した。

「あなたみたいな人が使った後のトイレに入りたくない。わたしの後にも使って欲しくない。あなた、どこか他のトイレを使って」

まるで、世界のあらゆる存在を憎むような眼で彼女は言った。

「ごめん。言っている意味がよく分からない」努めて冷静に言う。

「あなた、自分が優しいつもりで平気で人を傷つける人でしょう？ 顔見れば分かる。わたし、そういう人、一番嫌いな。だから、そこをどいて」

トイレの前の狭い通路。どう考えてもロマンのカケラもないその場所で、私は、その妖精のような女の子を見下ろし、訊いた。

「現役の学生さん？」

「だから、何？」

もえの声は相変わらず鋭い棘を含んでいた。私は、おもむろに右手を突き出し、彼女の首を軽く締めた。

「おい。幼い自我を守るために気軽に他人を刺していると、自分が刺されるぞ」

彼女の瞳がほんの一瞬、ロウソクの炎のように揺らめいた。そして次の瞬間、彼女は自分の後ろの壁に貼ってあるポスターの画鋲を抜き取り、その画鋲を私の顔に刺した。あまりにも突然で意外な反応に、うかつにも虚を突かれた形になった。

「ツツ！」

思わず刺された頬に手をやる。彼女は手にしていた画鋲を床に投げ捨て、言った。

「あなたも自分が強いと思っただけいい気になっていると、傷つくよ」

その瞬間、私は恋に落ちていた。目の前の、はるか年下の少女に。

「名前を訊いてもいいかな」  
明るく訊いた。

「どうして」

もえは鋭い口調で訊き返す。

「知りたいから」

もえの表情がわずかにゆるんだ。

「……黒崎もえ。あなたは？」

「サクラバ・ノブオ」

一瞬の間を置いてから「ニーチェは好き？」と、もえが訊いた。「嫌い」私が答えると、もえは「わたしも」と言っただけ笑った。それが、私の永遠のミューズ「黒崎もえ」との出会いだった。

★6

酒見が来店するというその日、19:00の開店5分前に、もえからメールが着信した。

**お酒が飲みたい。**

だけ。

**仕事が終わったら連絡します。**

一言、返事を返し、携帯を胸ポケットにしまった。

21:00までは店内は何事も起らず平穩に営業していた。そして酒見がやって来た。部下だかクライアントだか知らないが、若い連れが5人。当然のようにVIP席に案内され、その席にはすぐに女の子が8人、付いた。

渋谷でも高級大型店の部類に入る『グランド・スラム』で、酒見は最上級の太客の一人。週に一回、毎回違う顔ぶれを引き連れて来店し、最低100万使って帰る。そして当然のごとく、100万に見合う遊び方をした。

指名の女の子はいない。酒見は、くるくると違う女の子が隣に座ることを好んだ。

『グランド・スラム』のVIPルームは、ソファも壁も床もテーブルもすべてゴールド。趣味が悪いと言えば悪いが、成金のハートを刺激するという意味では最高のレイアウトが施された部屋だった。

何もオーダーのないままに、酒見の席には「ピンドン」のテーブルタワーが作られる。カエデという女の子と一緒に、酒見がタワーに酒を注ぐ。そして酒見はおもむろに、その積み重ねられたガラスのタワーを右手でなぎ払った。

ガラスの割れる鋭角な音が店内に響く。安っぽい宝石のような色をした液体が派手に飛び散る。毎度、お決まりのパターン。私は女の子たちを眼で席から立ちあがらせ、酒見の隣に空間を作った。

「失礼いたします」

深々と頭を下げながら、酒見の脇に立った。

「何だ、桜葉、また殴られに来たのか」

酒見の言葉に、頭を下げたまま「はい」と素直に返事を返す。

「おれに殴られて、いくらもらえる？」酒見が訊く。

「給料は変わりません」答える。

ボーイたちが音を立てないよう、限りなく静かに割れたグラスを片付け、テーブルを拭く。女の子たちは、緊張した面持ちで少し離れた場所からテーブルを囲んでいる。

いきなり、みぞおちに酒見の拳がめりこんだ。来ると身構えていれば耐えることは可能なパンチだが、あえて、うめきながらよろめいて見せる。

「もういい。下がれ」

酒見が言い、私は「失礼いたします」と答え、店の奥に消えた。

「大丈夫っすか、桜葉さん？」

大して広くもない店長室の中。茶髪で律儀な20代の店長・片岡くんが心配そうに水の入ったグラスを差し出してくれる。受け取り、グラスの水を一息に飲み干した。

「あのぐらいいは、何ともないよ」

笑って見せる。耐えられなくはないが、正直に言えば何ともなくはない。

酒見は身長が私と同じ185センチある。かつ、私の体重はミドル級の72キロだが、酒見は100キロを軽く超えているだろう。酒見は本気で打って来る。決して軽いパンチではない。

「あいつ、本気でムカつきますよね。金がなければ出禁にして、陰で殺したいっすよ。『GAD』の取締役だか何だか知らねーけど、何で金持ちってイヤなヤツが多いんだろう」

店長の片岡くんは、まるで青臭い大学生のように本気で憤慨し怒っている。そこが彼の良さであり、スタッフからもキャストの女の子からも信頼され、店がうまく回る原動力になっている。もちろん、それは金勘定を經理の金子さんが、しっかりと取り仕切っているからこそ、だが。

「いいんじゃないのかな。ああいう客がいて、おれみたいな役回りの人間がいて。それで世間は回ってるんだから」

その時、店長室のドアがノックの音と同時に開いて、若いボーイが顔をのぞかせ、低い声で言った。

「桜葉さん、すみません。ピン客が騒いでます」

「ういっす。今、行きます」

蝶ネクタイをいじって整え、すぐに立ち上がって、相変わらず騒々しいフロアへ戻った。

仕事を上がった時、深夜2:00を回っていた。店長室で黒いスーツの制服を脱ぎ、デニムのコンバースを履き、「SCHOTT」のジャケットを着てベースボール・キヤップを被る。

まだ、起きてるっ。

もえにメールを打つと、すぐに返信が来た。

遅すぎ。

『モーフィアス』で、独りで飲んでる。

すぐに行きます。

返事を返すと、速足で店を出て、歩道のガードレールに死ぬほど頑丈につないだ愛車の「ビアンキ」のロックを外した。

★  
7

「また、ろくでもない仕事をして来たの？」

もえが訊き、私は「そう」と一言答える。

カウンターの挟んで正面にマスターの倉道さんが立ち「何になさいますか？」と、落ちて着いた声で訊ねる。

「ジンジャーエールを下さい」と、丁寧に答える。

10分後、大ぶりのグラスに入ったジンジャーエールが運ばれて来る。

四谷の裏道で創業して40年経つ、バー『モーフィアス』のジンジャーエールは生のシヨウガから作っているのです、出来るまでに時間はかかるが味は絶品。まさに大人の味だ。

「相変わらずお酒、飲まないんだ」

もえが左隣の席からチラリと私を見る。

「うん」と答える。

「バカみたい」と、もえが言う。そして続ける。

「ノブオって虚構の世界の住人だね。自分でフィクションを作り上げて、そのフィクションの中で生きてる」

「え？」

もえは突然、話の核心に切り込むので、心の準備がないと、しばし、混乱する。

「ごめん、もえさん、言っている意味がよく分からない」

「お酒も煙草もやらない。哲学を専攻して、ボクシングやって、仕事で女の子を守って。」



ネズミを飼って孤独を気取って。そんな『レオン』みたいな自分をかっこいいと思ってるでしょう。ノブオは、そんな自分に酔っているだけ。だから本当は自分だけいいればいいのよ。他人は所詮、自分を映す鏡でしかない」

しばらく、もえの言葉について考えてみた。そして言った。

「うん。そう言われてみれば、そうかもしれない」

「あなたは本当に嫌なヤツだと思う。でも、あなたも、わたしのことを嫌なヤツだと思っているでしょう」

「そんなことない。もえさんはとても誠実で優しい人だと、おれは思う」

「何だか分からないけど、あなたと話していると無性に腹が立つ」

「じゃあ、帰る？」

「一人で飲んでよりマシだから帰らない。デロデロになるまで酔いたい」

もえは吐き出すようにそう言うと、自分の名義でキープしている「シーバスターガール2 5年」のボトルをつかみ、自分でロック・グラスになみなみと注いだ。

「そういう飲み方すると早死にするよ」一応、言ってみた。

「全然、構わない。むしろ、早く死にたい」

予想通りの返事が返って来る。私は自分のジンジャーエールを一息に飲み干し、マスターの倉道さんに目で合図して、おかわりを頼んだ。

「もえさんに死んで欲しくない」

「ほら、あなたは自分の都合しか考えていない」

もえは、まるで年季の入ったアル中のように、グラスの酒を一気にあおった。

「もえさん、あんまり心のガードを高く上げすぎると、フットワークが止まるよ」

「何それ？ 言っているイミが分からない」

「いつか、分かる」

「別に、分かりたくない」

その時、もえはすべてをあきらめたような眼で、カウンターの向こう側の壁を、ただ、じっと見つめていた。

泥酔し、水揚げされたヤリイカのような軟体動物になってしまったもえを、四谷三丁目の部屋に放り込み、四谷の駅前に駐輪していた「ビアンキ」の所に戻った時、メールが着信した。りのだった。

**桜葉さん、起きてますか？**

**良かったら、朝ご飯と一緒に食べませんか？**

0・3秒考えてから「いいよ」と返信する。直後、携帯に電話が掛かってきた。出ると、りのが「直接話した方が早いと思って」と爽やかに明るい声で言った。

「うん。何時にどこに行けばいい？」

「わたし、家、千葉の本八幡なんです」

りのの明るい声が、卓球のラリーのように小気味良いテンポで返って来る。

「行くよ、そっちまで」

「いいですか？ すみません」

「総武線の本八幡でしょう？ 40分後に改札で」

「はい、じゃあ待っています」

通話を切ると、外しかけていた「ビアンキ」のロックをもう一度嚴重に掛けた。本八幡まで自転車で行けないこともないが、さすがにちよつと時間がかかり過ぎる。

私は「スイカ」のカードに5000円をチャージすると、JRの改札を抜けた。

「普通だったら、ファミレスで朝食とかありえない」

そう言って微笑む小林りのは、やはり可愛い。

何だろう？

典型的な男の好む女を演出している顔の裏にある、恐らくは暗く病んだ心の深い闇に、どうしようもなく気持ちが悪く吸い寄せられていくのを感じる。

「これ、ワリカンでいい？」

「ジョナサン」の窓際の禁煙席に並べられたモーニング・セットを指差し、わざと訊いてみる。

「それも、わたし的にはありえないです。わたし、男の人とご飯食べて自分でお金払ったことない」

りのは、男の鼓膜をなでるような声で笑った。

「冗談だよ。ファミレスのモーニングぐらいはおごる。でも、おれ、金がない時はないって言うから」

「分かってる。わたし、お金のことで別に桜葉さんに何も期待していない」

微妙に複雑な心境になり、ふと訊いてみた。

「いままで貢がれたもので、一番、高価なものって何？」

「うーん、そうだな。120万円のブルガリの時計かな？ お店一軒、貢がれそうになったこともあったけど」

笑うしかなくて「ははは」と声を出して笑った。でも、小林りのは、そういうことが屈託なく似合う女の子だった。貢いで何の見返りもなかったとしても、貢いだこと自体に男が納得し、満足するタイプの女。ある意味では、もつとも水商売に適性があるタイプ。なのに下品なところは微塵も見せない。誰がどう見ても、私が一緒に朝食を食べているのは、お嬢様育ちの美人女子大生以外の何者でもない。

窓から差し込む朝の光が、りのはの黒く美しい髪を水面のように輝かせる。

「今日、桜葉さんて、何時まで一緒にいられますか」

りのに真剣な眼で訊かれ、一瞬、ドギマギとする。

「ボクシングのジムをさぼるなら、夕方5時までに渋谷に戻れば大丈夫」

「ふーん」

小林りのは、その時、恐らくは商売で使うような見事な小悪魔顔で微笑んだ。

「わたしと一緒にいるために、ボクシングのトレーニング、さぼる？」

急にため口になって、りのが訊く。

「う……ん、さぼる」

まるで優秀な取調官の誘導尋問にはまるように、私は無意識に返事していた。

「わたし、桜葉さんと一緒にやりたいことがたくさんある」

そうして再び、育ちのいいお嬢様に戻ったりのに、いつの間にか心理的なアドバンテージを持って行かれつつあることに気付く。気付いたが、彼女に翻弄されつつある自分を、どこか心地よく楽しんでもいた。

ファミレスを出て、金を使いたくなかったので、りのを公園に誘った。が、寒いところが苦手だと言われ、本八幡駅のそばの「スターバックス」に入った。

10月も、もう終わり。こういう言い方もどうかと思うが、確かに、こんなハイクラスの女の子を底冷えのする秋の公園のベンチに座らせるわけにもいかない。だが、私は、公園のベンチよりも、むしろ「スターバックス」に気後れする。年齢のせいに他ならないが、注文の仕方が難しすぎてビビる。

コーヒーは種類が多すぎてよく分からないので、一番簡単なオレンジ・ジュースを頼む。りのは、意味不明なやたらと長い名前のソイ・ラテを注文していた。

「スターバックス」の奥まった場所にあるソファ席で。りのは「免許が取りたいんです」と言う。

「いいんじゃない。どこにドライブ、行きたい？」訊くと「違うんです」との返事。

「ほら、車が運転出来れば、死にたくなかった時に、どこか遠くの森の中で練炭自殺が出来るじゃないですか」

「それは冗談で言っているの？」

「冗談じゃないです。わたし、死のうと思えば、いつでも死ねます」

りのの眼を正面からじっと見つめた。りのは、人が足を踏み入れたことのない高地の湖のように澄んだ眼の色をしていた。

何でまた？ とも思わなかったし、彼女までもが、とも思わなかった。彼女は彼女なりのトラブルと心の傷を抱えているのだからと思う。

私自身に自殺志向はないが、死に向かおうとする人間の気持ちは理解出来る。そもそも死を考えない人間は、哲学なんてやらない。

もえも、りのも、そして、みなみも、自殺願望がある。もちろん、彼女たちは個別の問題を抱え、それぞれに形の違う心の闇を抱えている。でも、一方で、若者が自殺を志向するのは、時代の空気でもあると思う。

例えば、私たちバブル世代が、若い時に時代の空気として狂った金銭感覚を持っていたように、今の若い人たちは、時代の空気として生に執着を持たない。私はそのことを悲しいというより、悔しいと思う。彼女たちが、生きることには希望や夢や、そして幸福を見いだせないことに。

もうすぐ25歳になるみなみが一番好きな人間は『エヴァンゲリオン』のアスカだ。私は『エヴァ』に詳しくはないが、アスカに自分を重ね、感情移入する、みなみの気持ちは分かる気がした。

「りのちゃんは、『エヴァンゲリオン』好き？」訊いてみた。

「『エヴァ』は見ないですねー。わたし、古いマンガが好きで『あしたのジョー』とか『おれは鉄平』とか、古いスポコンをよく読みます。あと『鋼鉄ジューグ』とか『人造人間キヤシャー』とかも好き」

「まさに、おれらの世代のツボだね。それ、営業でオyajの趣味に合わせているわけじゃないわ、本当に好きなの？」

「本当に好きです。最近のミョーにややこしいヤツより、あの頃のアニメとかマンガの方が世界観がシンプルで好き」

「歌とかも古いのを聴くの？」重ねて訊いてみる。

「あ、歌は、わたし、福山雅治が好き」

瞬間、お門違いと知りつつ、微かな嫉妬を覚える。

「あ、桜葉さん」

りのが、南国の太陽のように顔を輝かせる。そんなに一直線な声で呼ばれると心臓が跳ねる。

「はい」と、はっきり返事をする。

「わたし、何か、歌いたくなってきちゃった。カラオケに行きませんか」

と、小林りのは、あっけらかんと言いながら、すでに立ち上がっていた。

★10

11月3日土曜日・文化の日。「渋谷区神宮前格闘技術総合体育館」、通称「格体」（かくだい）で「心取り研修会」は午前11…00からスタートした。

「格体」には、相撲の土俵から柔道の畳、ボクシング・リングまで完備されていたが、「心取り研修会」が行われるのはいつも、小学校の体育館ほどの広さの球技スペース。隅にサンドバッグやパンチング・ボールが設置されてはいるが、中央には何もなく、ただ、床に80センチおきに黄色いラインが引かれている。相手との「間合い」を測り、確認するためのライン。

集まっているのは、都内の「心取り」18名。言うなれば裏の世界の闘いのプロが顔をそろえているわけだから、一応、ラインナップとしては「夜の世界のグリーンベレー」とか「夜の世界のデルタフォース」とでも呼ぶべきなのだが。

佐々木、岡田、宮下、檀上、霜島、城田、木場、渡辺……。

特殊な仕事柄、それほどメンツの入れ替わりがあるわけではないので、どいつも付き合いは長い。おまけに講師として前に立っているのが、呑兵衛（のんべえ）で有名な須藤さん。かつ、みんな適当に動きやすい服を着ているだけなので、部屋着のスウェットとか、短パンにTシャツ、ひどいヤツはハンテンをはおっている。

「心取り研修会」の空気は決して緊迫したものではなく、どちらかというと休日の昼間に無理矢理集められた「パパさんバレー」の練習会といった雰囲気だった。

「おい、みんな、一応、ちゃんと聞け」

須藤さんが、特に気合を入れる風もなく、明るく呼びかける。適当にくつろいで立っていた「心取り」たちが須藤さんの方を向く。

「おまえらにはいまさらな話だろうが、こういう機会も1年に1回だから一応、初歩からおさらいしておく。まず『心取り』の仕事で最初に覚えなくちゃならない技術は、金玉つぶしと、目ん玉つぶしと、噛み付き。この三つだ」

須藤さんは、そこでいったん言葉を区切った。

みな「何で、いまさらそんなことを」といった空気だ、場はしらけている。

須藤さんは、すべて承知しているという感じで一度、コクリとうなづく続けた。

「だが、その『初歩』は、裏の世界で格闘やっているヤツはみんな知っている。だから、そうしたワザを実際に使うことはまずない。相打ちになっちゃうからな。で、おまえらもよく知っているだろうが、実際の格闘でマンガや映画みたいな殴り合いになるケースは、まず、ない。普通、すぐに距離は潰れてグラップリング、つまり組み技から寝技の流れになるのがフツーだ」

もともと頭よりも身体を動かすことの方が好きな連中、みんな、しだいにもぞもぞと手足を動かしはじめ、軽くシャドーしている者もいる。須藤さんは特に注意もしない。

「一応、聞いてよ。で、次な。だから、おれたちは組み技や寝技は慣れている。じゃあ、おれたちが一番、慣れてない攻撃は何か分かるか」

須藤さんは、急に鋭くなった眼光で一同を見回す。全員が動きを止めて須藤さんを見た。

場が微かに帯電したように感じられる。

「蹴りだ」

と、須藤さんは、大きくはないが、よく通るクリアな声で言った。

「蹴りの威力はパンチの3倍と言われている。だが蹴りは、どうしても出るまでに時間がかかる。対してパンチは誰でもすぐ出る。だから実戦でいきなり蹴ってくるヤツは、まずいない。おれも、いきなり相手がキックで襲って来たというケースには遭遇したことがない」

そこで、メンバーの間で小さな笑いが起きた。

「だからこそ、だ」

須藤さんが、場の空気を締め直すように真面目な声で言った。

「おれたちはキックになれていない。だから今日は、ひたすら蹴りに対処する練習をする。慣れたヤツならパンチはみな、ノーモーションで打ってくる。しかし、キックをノーモーションで放てるヤツは、まずいない。相手のモーションが見えたら、すかさず距離をつぶせ。それだけだ。後は勝手にやれ」

須藤さんは「はじめ」の合図で「パーン」と大きな音で手を叩いた。

私は、隣に立っていた池袋の宮下に「やるか」と声を掛けた。

「おう、桜葉か。いいよ」言った瞬間に、宮下のローキックが飛んで来た。咄嗟に距離を詰め、そのまま宮下を床に押し倒し、袈裟固め（けさがため）に持ち込んだ。

2時間の研修会を終えて、午後1…00。「格体」の前で外着に着替え、たむろするおれたちに講師の須藤さんが呼びかける。

「んじゃ、真昼間から、飲みに行つちまうかあー!?」

「おいーす」と、全員が嬉しそうに叫ぶ。

私は1年に1回の、この集まりが好きだ。1年のうちで一番リラックス出来る日かもしれない。お互い、他人には言えない裏の事情を分かち合える、気心の知れた古い仲間。かつ、物理的に最強の軍団。今、ここに自衛隊の精鋭20人が突入して来ても、エリート極ムダンク』とか『キャプテン翼』の登場人物に自分がなったような不思議な錯覚を一瞬、覚える。

何の因果でこんな商売をはじめちゃったのか、と考えることもしばしばあるけれど、今

日一日だけは、自分が「心取り」で良かった、と心から思えた。

★ 1 1

ノブ。みなみだよーん。

疲れた……。もう、本当に死んだ方がマシ。頭上に隕石、落ちて来ないかなーって、いつつも思ってる。

というのは本題ではなく。

『Q』、観て来たー！ー！ー！ー！アスカのコスプレして。

ノブが『エヴァ』に興味がないのは分かってるんだけど、

他にこんな話、する人いないし。

すごく長くなると思うから。

別に読まなくてもいいから。勝手に送る。

あのねー、一言で言えば、庵野監督がやりたかったのは、コレなんだよ。

たぶん、今回の『Q』は、一般的には、総スカンを食うと思う。

全然、親切な作品ではないから。

正直に言えば、わたしも分からないところ、たくさんあった。

でもね。

要するに、劇場版『序』『破』は、この『Q』をやるための布石だったんだよ。

わたし、テレビ版が大好きだったから、最初に『序』『破』観た時、「なんじゃこりゃー」って、頭に来たのね。



でもね、エラーソーだけど、庵野監督の気持ち、ちょっと分かった気がするの。

『エヴァ』ってさ、もともと、そんな一般受けするような内容じゃないんだよね。

で、マニャックでオタクなイメージが最初のうちはあったわけだけど。

それを『序』『破』で、フツーにかっこよくて、面白い作品にして、裾野を広げて、大衆性を獲得して。オシャレな企業とタイアップしたりして、先端的なイメージが出来た。

で、みんなが観てくれる環境を作って、ようやく、一番やりたかった『Q』を作った。

だから、彼としては、これで納得、ある意味で気が済んだんだと思う。

なんだろうーな！。

テレビ版作っていた時、庵野監督はうつ状態で、だからカルトに面白い作品が出来た。

でも、『序』『破』作っていた時、彼は、結婚して、ハッピーで、落ち着いちゃって。

だから、大衆受けはするけど、コアなマニアを納得させるものにはならなかった。

観るまでは不安だったの。

でも、彼はやってくれた……！……！

少なくとも、わたしは『Q』に100%満足した。

分かんない部分もたくさんあったけど、そこも含めて、大満足。

あー、スッキリした。

聞いてくれてありがとう。

別に、スルーしてくれていてもいいんだけど。

少なくとも、こんな一方的で身勝手なメールを送ることの出来る相手が一人でもいるというこ  
とは、結構、幸せなことだったりする。

あー、明日も、昼職やって、そのまま、お店直行。

パーティーチケットも売らなきゃだし、風邪だし、微熱あるし、喉痛いし、眠れないし、便秘だし、  
食べられないし、レキソタン依存だし、はあ、もう、本当に頭痛い。

ごめん、独り言だよ。別に、まじめに受け止めて、返事くれなくていいから。

まあ、いいや。明日は明日の風が吹く。

吹くといいんだけどね。吹かないんだ、これが。

まあ、いいや。

ノブ、また、ご飯食べようね。今度は焼肉がいいな。

じゃね。ばいばい。

P.S.

「槍でやり直すんだ！」が、受けた！

あと、わたしが『エヴァ』観ていて一番キツいの、やっぱアスカが精神的身体的に傷つくところ  
なんだけど。

今回は、アスカが元気でイキイキしているから、単純に『Q』が好き、つてもある！

P.S.2.

『輪るピングドラム』というアニメも良いよ。

何だか意味分かんないんだけど、無性に泣けた。

暇があったら、YOUTUBEで見つみて。

あ、主題歌は、やくしまるえつこだよ！

仕事が終わりに、部屋に帰った午前4:00。安物の豆で淹れたコーヒーを飲みながら、私はYOUTUBEで検索した『輪るピングドラム』の映像を観てみた。たぶん、みなみのツボは、そこではないのだろうと思いつながらも、トレードマークのように現れる無表情な「ペーニンゲン」の顔が、無表情なのに悲しげで少し泣けた。

一瞬、画面に流れた文字。

### 「選ばれないことは、死ぬこと」

たぶん、そういうことなのだろうな、と思う。私はすでに、そういう人生の季節をはるか過ぎてしまったけど。私は、もう、良くもあしくも「強く」なってしまったけど。

『輪るピングドラム』で泣く、みなみの気持ちは理解出来た。理解は出来るけど、共感してあげることの出来ない自分を、悲しく申し訳なく思いながら、デグーのココとルルにヒマワリの種を与えた。

### ★12

お互い詮索するのが嫌いな人間同士、みなみの生い立ちを詳しく聞いたのは、つい最近のこと。

平沢みなみは、東京・吉祥寺で生まれ、育った。生まれた時には、すでに父親はおらず、小学校に上がる頃に母親も姿を消して、妹と一緒に施設で暮らしていた。

そうした幼少期を過ごした結果、尋常ではない努力家となり、小学校も中学校も学年トップの成績で卒業。都内有数の進学校に入学、生活費を捻出するために、学校に隠れてバイトを3つ掛け持ちしながら勉強し、柔道部に所属して「ヤワラちゃん」と呼ばれていた。

生活は苦しく、根っ子は暗くシリアスな性格ながら、学校では頑張り屋さんで、ほがらかに振る舞い、他人に対して絶対に偏見を持たず、人の心の痛みに、ことさら敏感だったため、誰からも好かれた。

都内では東大に次ぐ難関の帝都大学に推薦で進学、最愛の彼氏と幸せな大学生活を送っ

ていた。

しかし、幼い頃に失踪していた母親が借金を残して自殺。母親の残した借金の返済と妹の学費を稼ぐために、結局、大学を中退して夜の世界で働きはじめた。

もともと容姿に恵まれ、頭の回転が速く、話題も豊富。場の空気を読むことに関しては天才的で、無数の仮面を使い分けることも出来た。加えて「努力」ということに関しては生粋のエキスパート。すぐに業界では名前の知られた売れっ子になった。

源氏名「さくら」がキャストに入れば、赤い店も黒くなる。

そんな伝説が生まれ、みなみは特定の店に所属しない「派遣キャバ嬢」となり、助っ人的に活躍した。

だが、本質的には夜の世界に不向きな生真面目な性格。なまじ売り上げ成績がバカみに良かったことが災いし、周囲の無遠慮なプレッシャーに追い詰められて、徐々に燃え尽きていった。

「ノブと最初に出会ったところが、ハナだったなー」と、みなみは遠い眼をして言う。同じ世界に住む者同士、「そんなことないよ、今だって」などと気休めを言う気は毛頭ない。誰だって、どんな世界だって、山もあれば谷もある。それが人生。たとえ、登る理由が何であれ、下る理由が何であれ。

ただ。

と、いつも感じる切なさに、少しだけ胸が苦しくなる。

夜の世界には、エロいだけのバカな女がアリの数ほどいる。身体を武器に男から金を搾り取り、感性が1ミリも動かないような、そういう無自覚な女が、どんな目に合おうが、自殺しようが、私は何とも思わない。

もちろん夜の女は、男に夢を見せて、その代価として収入を得る。そのことが悪いことだとは思わない。

ただ。

と、やはり、思う。

みなみのように、悲しいほどにすべてが「見えて」しまう女が苦しんでいるのを見るのは、男としてしんどかった。自分には何も出来ない、むしろ、何もする立場にはないからこそ、余計に、そんな、みなみを傍で見続けることがキツかった。

宮本武蔵の逸話ではないけれども。地面に引かれた幅10センチの線の上は誰でも逸れることなく歩くことが出来る。しかし、頭上10メートルにある幅10センチの板を渡ることは誰にとっても難しく、怖い。

ヤンキーは自殺しない。

つまりは、そういうことだ。

みなみは「ヤンキー」ではない。むしろ「ヤンキー」とは対極にいるような人間だ。つまり、みなみには、いつでも自殺する可能性がある。その現実と向き合うことが怖かった。とてもとても怖かった。良くもあしくも、私にはもう「怖い」と思えるものは、ほとんど残されてはいないのだけだ。

★13

「銀河ボクシング・ジム」のドアを開け「こんちわーす！ よろしくお願いまーす」と、とても元気よく大きな声で挨拶する。

「元気よく、大きな声で挨拶する」ということに関して、私の右に出る者は日本中探しても他にはいないと思う。少なくとも40代に限定すれば。そして「元気よく、大きな声で挨拶する」という習慣は、もしかしたら、ボクシングをはじめ得ることの出来た、もつとも、善（よ）きことかもしれないと思う。

「元気よく、大きな声で挨拶する」というのは、とても大事だ。「元気よく、大きな声で挨拶する」ということが大事だ、というのは、大抵、幼稚園くらいで習う人間関係の基礎の基礎。でも、その基礎を守り続ける大人は少ない。

「こんにちは！」「こんにちは！」と明るく、元気よく他人と挨拶を交わすことによつて、雨の日だろうと雪の日だろうと、そこには「プラスの磁場」が生まれる。一瞬のことだけど、そこに「善き空気」が流れる。そのささやかな一言が、一日を明るく、健全な流

れへと導く力となる。少なくとも、私は、そういうものだと思っているし、体感している。

よく知りもしない相手に挨拶することを躊躇（ちゅうちよ）するのは、自分が恥をかきたくない、笑われたくないという心理。しかし、もし、自分が笑いや者になったとしても、むしろ、それは他人を笑わせることが出来たと考えれば、それもまた、善きこと。

自分が、笑いや者になることを恐れなければ、この世界から90%、怖いものはなくなる。「企み」のないところに、「争い」は起きない。

男子ロッカールームでファイト・ショーツとTシャツに着替え、フロアに出る。フロアでは、いつもの女性がシャドーをしている。たぶん、30代だろうと思うのだが、話したことはないので名前も素性も知らない。

外見的に洗練された女性ではない。体系は太目で丸く、白いものの混じった長髪を無造作に束ね、どちらかと言えばガサツそうな顔をしている。でも、私は彼女に好意を持っている。ダイエットのために漫然と身体を動かすのではなく、ボクシングの技術を習得するために一生懸命に鏡に向かいシャドーする彼女の姿を美しいと思う。

練習の邪魔をしてはいけないので、声はかけず、鏡越しに彼女に目礼する。彼女も鏡越しに「チラ」と挨拶を返して来る。たぶん彼女も私に対して悪い感情は持っていないことが伝わって来る。その一瞬の挨拶の交換で、少しだけ心が暖かくなる。

まず、シューズを脱いだ状態でマットを敷き、ストレッチ。ジムで決められたストレッチのメニューはあるのだが、私は昔、しばらく習っていたイシュタ・ヨガをストレッチの代わりに取り入れている。20分かけて様々なポーズを取った後、足を組み、5分ほど呼吸を整え、瞑想する。最後に手を組んで思い切り天井に向けて伸ばした後、リングに向けて頭を下げ、マットをしまう。

リングの隅に腰かけ、バンテージを拳に巻く。立ち上がり、もう一度、大きな声で「練習はじめます。よろしくお願いします！」と、トレーナーに向け挨拶した。

★14

「ハルキが好き」と、もえは言う。

「ハルキのどんなところが好きなの？」と、私は訊く。

「人間に対して誠実なところ」と、もえが答える。

私は微かな嫉妬を覚える。私だって人に対して誠実であろうと努力はしている。特に、少なくとも、もえと、りのと、そして、みなみに関しては出来るだけ誠実であろうと努力している。切実に。かなり、必死に。

「ネズミが見たい」というもえを、その日、はじめて部屋に入れた。

渋谷区・松濤（しようとう）の古くて小さな中古マンション。エレベーターはあるけどオートロックはない。

玄関のカギを開け、二人一緒に入ると、もえは声には出さずに「ふーん」という顔をした。そして、まるで自分の部屋のように躊躇なくキッチン・カウンターの前に置かれたイームズ・チェアに座り、オットマンに足を投げ出す。

イームズのラウンジ・チェアとオットマンのセットは、この部屋にある唯一の高級家具だ。正規品で64万3650円。24回の分割で買った。高い買い物だが、一度、この椅子に座ってしまったら、他の椅子は軽度の拷問器具にしか思えなくなる。

イームズの座り心地を確かめるように、もえは軽く身体を前後に揺らした後、再び、声には出さずに「ふーん」という顔をした。

オットマンに投げ出された、細いデニムに包まれたもえの足に、ほんの微かな情欲を覚える。でも、それは本当に微かで一瞬の情欲。私にとってもえは、性的な対象ではない。私にとってもえは、どちらかと言うと、神とかアイデアといった類の形而上学的な存在であり、憧れはあっても、所有欲、独占欲を抱く対象ではなかった。

「ネズミは、どこ？」と、もえが訊く。

「こっち」

私のもえを、窓際が一番陽当たりが良い一等席に案内した。

60センチの高さのケージ。ネズミは唯一の道楽なので、バーチャステージ、エサ入れ、回し車など中のレイアウトには5万円をかけ、セッティングに丸一日を費やした。

2匹いるデグーはどちらもメスで、茶色がココ、青がルル。2匹とも生後5ヶ月。人間で言えば19歳のもえと、ほぼ同じ年齢になるだろう。

金網の隙間から指を差し入れながら「ただのネズミじゃん」と、もえは言う。

「でも、鳴く」と、ムキになって答える。

「鳥みたいに鳴く。気持ちがいい時はピヨピヨ鳴くし、警戒すると猛禽（もうきん）みたいな声も出す。鳴き声で仲間とコミュニケーションしているんだ。性格は穏やかで人によくな

つく。前足で道具も使えるし、人工知能や言語学の研究に使われるくらい頭がいい。別名、  
アンドスの歌うネズミ」

「ふーん」と、もえは今度は声に出して言う。

「何で、ココとルルって名前なの」

「こっちはココっぽくて、こっちはルルっぽかったから」

「バカみたい」と、もえは言う。

私は、ココを手に乗せてケージから出し、もえに渡した。

「大丈夫。慣れているから逃げないし、噛まない」

もえは、おそろおそろココの身体を両方の掌で包んだ。もえの手の中からココが顔だけ  
出して、アーモンド型の黒い瞳でじっと彼女を見つめる。

「とても暖かい」と、もえは言った。

「ただのネズミだよ。だけど、生きてる」

言うと、もえは、声を出さずに少しだけ微笑んだ。

「ノブオに頼みがある」

デグーと遊んだ後に、消毒薬で手を消毒しながらもえが言う。

もえから頼み事は珍しい。女の子に頼られるのは嫌いじゃない。

「うん。何でも聞くよ。もえさんの頼みなら親だつて殺す」

もえは、クスッと笑い「そんな大したことじゃない」と続けた。

「村上春樹を朗読して欲しい」

「朗読？」

「そう。声を出して読んで、わたしに読み聞かせて欲しい」

「いいけど、どうして突然？」

「自分でも分からない。ただ、ノブオにそうして欲しいと思っただけ」

「全然大丈夫よ。村上春樹は全部ある。全集で揃っているし、マニアックなエッセイ本まで  
全部ある」

「ベタだけど『ノルウェイの森』を読んで」

「いいよ、分かった」

私は書棚の前に行き『村上春樹全作品 1979-1989/6』を抜き取り、箱から本を出した。  
もえは、イームズに深く沈み込み、眼を閉じている。



もえの傍らの床に足を投げ出して座り、和田誠の描いた切手の装丁が施されたハードカバーを開いて「行くよ」と言った。

「いいよ」もえが、かすれたような小さな声で答える。

僕は三十七歳で、そのときボーイング747のシートに座っていた。その巨大な飛行機はぶ厚い雨雲をくぐり抜けて降下し、ハンブルグ空港に着陸しようとしているところだった。

「ノブオ」と、もえの声に中断された。

「何？」訊く。

「もっと、優しい声で読んで」

「了解」と、答える。

十一月の冷ややかな雨が大地を暗く染め、雨合羽を着た整備工たちや、のっぺりとした空港ビルの上に立った旗や、BMWの広告板やそんな何もかもをフランドル派の陰うつな絵の背景のように見せていた。やれやれ、またドイツか、と僕は思った。

「うん、いい感じ。ノブオもたまには役に立つ」

24歳年下の美少女が言う。

「うん、おれだって、たまには役に立つ」

「ノブオ」

「何？」

「切々（せつせつ）と生きる」

「うん？」

「切々と生きる。ノブオを見ていたら、ふと、その言葉が浮かんだの。それだけ。深い意味はない」

私は10秒間、沈黙した後、出来るだけ優しい声で続きを読みはじめた。

開店して20分後、19…20に店長室に呼ばれ行くと、熱血正義感の片岡くんに言われた。

「桜葉さん、銀座の『クルーチェ』すぐ来て欲しいって。特にトラブルではないみたいだけど、スジの人が二人いるから、一応、待機してくれってことです」

「そのヒトたち、入店、何時かな？」

「開店と同時にいいんで、まだ30分経ってないですね」

「分かった。じゃ、すぐ行きます。『クルーチェ』に連絡入れておいて」

50秒後には店の前の歩道で、愛車の「ビアンキ」にまたがっていた。

渋谷から銀座までは、実は6キロしか離れていない。毎日、スクワット100回を日課にして10キロ・ランする私の脚でイタリアの青い彗星である「ビアンキ」を全力で飛ばせば『クルーチェ』までは10分を切る。

銀座7丁目の歩道のガードレールに愛車を固定。5秒で呼吸を整え、「ピタゴラス・タワー」のエレベーターに乗り、蝶ネクタイを直しながら7Fのボタンを押した。

北野武の映画に出て来るみたいな二人連れだな、というのが第一印象だった。単なるチンピラではないが格はない、というタイプの客。一応、どこかの組に籍を置いてはいるのだろうが、末端の末端。極端な話、殺してしまっても誰も文句は言わないだろう。

ボーイを装って遠目に様子をうかがっていた。よりによつて接客しているのが源氏名「みそら」の小林りの。だが、そこで平常心を失ったら、この商売は務まらない。店で働く女の子に対して私情が混じるようになったら、それこそ、虎狩りに行って虎に食われるに等しい。

坊主頭が小林りのの太ももに触ったところまでは見過ごしたが、やんわりと止めに入ったボーイに、金髪が酒をぶっかけたところで介入することにした。

眼で合図して、小林りのを立たせてボーイと席を外させた。入れ違いに、アホみたいに大股を開いて座る、その男たちの前に立った。

突然誰もいなくなった席に、デカイ男が立ちふさがり、明らかに坊主頭と金髪の中身の薄そうな頭の中で警報が鳴ったことが手に取るように分かる。

ヤンキー高校生でも武闘派の極道でも変わらないことだが、いわゆる「ケンカ」というものを生業（なりわい）にして生きている者が、相手が強いか弱いかを判断する場合、その基準にしているのは体格ではなく、姿勢と眼力だ。ヤクザ映画のように背中を丸めて、肩をゆすっているようなヤツは怖くない。すぐに怒鳴るヤツも怖くない。虚勢を張るのは、むしろ自分が弱いことをアピールしているようなもの。一番怖いのは、背筋が伸びて姿勢が良く、視線がまったく揺れないヤツ。ある程度、実戦のケンカを経験した人間であれば、理屈ではなく空気でそのことは理解している。だから、逆に、敵を威圧する時は、自分がそういう男になればいい。

「アンダあ、オメエーは、おい！」

坊主頭と金髪が同時に立ち上がったが、私は彼らの前に仁王立ちになったまま、微動だにできなかった。

二人は私より身長が10センチは低い。パンチが来たら避ける、という意識すら捨てて、私はただ無機物の岩を見るように、黙って二人を見た。ただ、黙って見続けた。そして、鼻から静かに息を吸い込むと、背中から肩にかけての筋肉から「気」のようなものを放つ。

一瞬、場の空気が鋭利で硬質な金属のような固体に変質した。

そのスジの二人は、何も言わず、お揃いの「ルイ・ヴィトン」のセカンドバッグを持ち、席を去る。彼らの背中に視線を送り続け、二人がきちんと会計を済ませるまで見届けた。

「ありがとうございましたー」

ボーイと女の子たちの明るい挨拶と同時にドアが閉まると、途端に、静まり返っていた店内に喧騒が戻る。

蝶ネクタイに手をやり、すぐに帰ろうとすると、店の隅で、店長の小暮さんに呼び止められた。

小暮さんはチビデブハゲの50代だが、とても穏やかで優しい人柄、コマメに気が回るタチなので、女の子たちにも人気がある。

「桜葉さん、すみませんね。ありがとうございます。どうなるかと思いましたが、騒ぎが大きくなって良かったです」

「はい。何もなければいけないに越したことはないですから」

「でも、やれば勝てたでしょう？」

「はい、もちろん」笑って答える。

「せっかく強いのに闘わないのは、何だかもったいなく思えます。ボクみたいな男から見

ると」

そんな少年のように素直な口調が、恐らく、この一見冴えないおっさんである小暮さんの人望の秘訣なのだろう。

「ウンチクみたいになっちゃいますが」

言うと、小暮さんは「はい」と答えながら、まるで、はじめてブルース・リーの映画を観た少年のような顔をする。

「あの、試合で勝敗を決めるなら別ですけど、リング以外の場所では、むしろ逃げることの出来る強さ、負けることの出来る強さを身に付けるために、我々はトレーニンングするんです。少なくとも『心取り』という仕事では、闘った時点で負けです。闘ったらいけないんです」

小暮さんはしばらく黙って私の顔を見上げた後、「うーん、深い」と言って、何度かうなずいた。そして「ボトル、一本、お礼に持って行って下さい」と言って、店の奥に入ろうとした。

「あ、いや、私、酒飲まないんで」言うと「あ、そうか、桜葉さんは飲まないだった」と言って、小暮さんは、ハゲた自分の頭をマンガのようにぺちと叩いた。

「あ、じゃあ、そうだ、桜葉さん、ちよつと遊んで行きませんか？好きな女の子、付けますよ」

小暮さんは、さも名案を思い付いたとばかりに眼をキラキラさせていた。

その提案について、ちよつと考えてみた。

私は夜の世界で仕事をしているが、実は夜の世界で遊んだことがない。いいかもしれない。と思った。自腹ではこんな店で遊べないし、遊ぶ気もないが、一度くらい「接客」されてみたい。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

頭を下げると、小暮さんは嬉しそうにならずき、若いボーイに何か耳打ちした。

「どうぞ、こちらに」

ボーイに案内され、一番店の奥の死角になったようなひっそりとした小さな席に案内される。

「ご指名の女の子はいらっしゃいますか」

ボーイに訊かれ、一瞬、躊躇（ちゅうちょ）してから言った。

「小林……りの、さん。じゃなかった、あの、みそらさんをお願いします」

「かしこまりました」

そのボーイが深々と頭を下げて下がるのと同時に別のボーイがやって来て、目の前のテーブルに、無言で缶コーラを置いてくれた。ちょっと迷ってから、勝手に開けて一口飲む。

「ご指名、ありがとうございます」

眼を上げると、そこに立っていたのは『アラン&チューリング』を着たお嬢様な美人女子大生ではなく、アップにしたボリューム豊かな髪に、ゴージャスなドレスをまとった「みそら」だった。

★16

「かつこ良かったよ、桜葉さん」

右隣に座った「みそら」こと、りのは、そう言うと、スっと私の右肩に頭を載せた。

「やっぱり、強い男は守られてる感があっついいな」

基本的に、私は女の子と一緒にいても話をしてるだけで、フィジカルなコンタクトとこのはまずない。もちろん童貞ではないけれど、女性経験がそんなに豊富な方でもない。

男って、こんなに簡単に落ちるんだ！

新鮮な驚きに胸を満たされながら、ただ「肩に頭を載せられただけ」というシチュエーションで、その時、小林りのに完全に心臓を掌握された自分に感動すら覚えていた。

その、孤島のように店内から隔絶された席で、小林りのは、まるで私の心を見透かしたように、あっけなく身体を離れた。

「率直に訊くけどさ」

彼女がそう口にした時、声も、彼女の周りの空気も、突然、マックスで冷房を入れたのかと思うほどに冷え切っていた。

「桜葉さんて、わたしの他に仲のいい女の子、何人いるの？」

しばらく考えてから言った。

「二人。だと思っう」

「ふーん」

「うん」

「その子たちと寝た？」

「いや、寝てない」

「わたしとしたい？」

「いや、したくない」

「ふーん」

小林りのは、まるで氷の女王のように冷たい視線で私の眼を射抜いた。

「その女の子たちと、わたしはどう違うの？」

もう一度よく考えてから返事をした。

「一人は、おれにとって神様みたいな人。もう一人はおれにとって家族」

「じゃあ、わたしは？」りのは訊く。

大きくツバを飲み込んでから言った。

「付き合って欲しい」

「どういう意味で？」りのは重ねて訊く。

「彼女として。恋人として」

「何で？」

「言わせたい？」

「うん、言わせたい」りのは言う。

「好きだから。惚れたから。対等な女性として」

「ふーん」と、りのは、またあの小悪魔な微笑を浮かべる。

「でも、わたし、やらせてあげないよ」

「別に構わない。性欲は自分で処理出来る」

「手伝ってあげるくらいはいいよ」りのは口角を上げ、言う。

「別に、手伝ってくれなくていい」

「どうして？」

「そういうことに巻き込みたくない」

「はあああああ」

小林りのは、明らかに「素」で深い深いため息を付くと、すべてを投げ出したかのよう  
に、ぐったりと背中をソファに預けた。

「桜葉さん、あなた、分かっている？ あなた、かなり最低の男だよ。たぶん、世界で下  
から15番目くらいに最低。ブッシュ大統領の次くらいに最低」

「たぶん、分かっている。と思う」

「ウソだ。あなたは自分の最低具合をきちんと自覚してない。自分が、どんだけ最低か自分で理解していない」

「うん。まあ、そう言われてみればそうかもしれない」

「わたしがあなたを傷付けてあげる。傷付くというのがどういうことか、わたしがあなたに教えてあげる。嫌と言うほど。本気で死にたくなるほど」

「うん」一言、答える。

「覚悟した？」小林りのの眼は、冗談抜き、100%真剣だった。

「……あのさ、おれにはおれなりに言いたいこともあるし、弁明したいこともある。まだ、伝わっていないこともある気がする。でも、言い訳みたいなことをするのは面倒だし、嫌なんだ。だから、りのちゃんの好きにすればいいよ」

「ねえ、タバコ吸っていい？」りのが訊き「もちろん」と答える。

りのがポーチからスリムなボックスを取りだし、1本くわえた。彼女の手の中から、そつとライターを抜き取り、火をつけてあげる。

「ありがとう」

りのは言って、細く、美しく煙を吐いた。そして、呟くように言う。

「いろんなお客さんを見てきた。身体を買われそうになったことも何度もあった。家族の理由でお金も必要だったし、わたしなりのプライドもあったから、がんばって、この仕事、続けてきた。そう、本当に嫌な客を死ぬほど見て来た。でも、あなたみたいに心底最低な人にはじめて会った。客じゃないから、なおさら最低。でも、好き」

りのは言って、私の眼をじっと見つめた。この眼に見つめられて落ちない男が存在するわけがない。私がもし女で、小林りののだったら、たぶん、1年で1億稼ぐことも不可能ではないと思った。でも、ふと、そのことがとつもなく悲しいことのようにも思え。

その瞬間、小林りのへの愛しさで胸が爆発しそうになった。

★17

部屋に帰った途端、携帯の電話が鳴った。出ると、もえだった。

「電話なんて珍しいね？ どうしたの」コンバースを脱ぎながら訊く。

「今、大丈夫？」

もえにしては、珍しく遠慮がちな声。

「うん、いいよ。ちよつと待ってて。落ち着くから」

私は携帯を手にしたまま、キッチンに行つて、グラスに水道水を注ぎ、イームズのラウンジ・チェアに座つた。

「はい、落ち着いた。いいよ、どうしたの？」

「分かつたの」

と、もえは妖精のような声で言う。

「何が？」

「あなたとわたしは、『心の偏差値』が同じなのよ」

「心の偏差値？」

「うん」

と、もえは静かな声で言う。そして、続ける。

「あのさ、東大出のバカつて、たくさんいるじゃない？ それは分かるでしょ」

「うん、分かる。勉強は出来るけどバカつてヤツは、たくさんいる」

「たとえばね、ハリウッドの大作映画を観るのに『心の偏差値』は必要ない。そこに、どれほど緻密な心理描写が書き込まれていようが、それを理解するのに『心の偏差値』は特に必要な。逆に、そういう『心の偏差値』を必要としない作品じゃないと、最大公約数的な共感を呼ぶヒットにはならない。そこまでは伝わっている？」

「とても、よく伝わっている」

と、答える。もえは淡々と、静かな口調で続けて言う。

「逆に『心の偏差値』が高い作品は、すごくパーソナルな内容になるから、最大公約数的な評価は得ない。映画で言うと、ジョン・カサヴェテスとかデヴィッド・リンチみたいな作品は、どれだけ世評が高くても、どこまで行っても、やはり『カルト』でしょう？ 要するに『心の形』が同じ者同士にしか響かない」

「もえさんの言っていることは、とてもよく分かる」

「そう、つまり『心の偏差値』というのは『人の心を見通す力』のようなもの。そう言う意味で、あなたとわたしは、たぶん『心の偏差値』が同じなの。だから一緒にいて居心地がいいんだと思う。それは、わたしにとって、かなり大きな気付きだった。それで、一応、あなたにも知らせておきたかつたの」

もえの話が、まるで的に弓矢が突き刺さるように的確だったので、思わず声を出して笑



ってしまった。そして訊いた。

「じゃあ、おれたちの『心の偏差値』って、いくつなの？」

「65くらい」

即答だった。受話口を通して伝わって来る、もえの声は、限りなく真面目だ。面白くな  
って、続けて訊いてみた。

「じゃあ、村上春樹の『心の偏差値』は、いくつ？」

「ジャスト70。アインシュタインも70」

もえの言葉には迷いが無い。

「じゃあ、秋元康は」

「あの人は63。前田のあちゃんが67で、AKB総体では64」

「スピルバーグとルーカスは？」

面白くなって、続けて訊く。

「スピルバーグは63で、ルーカスは59」

「ジョージ・ブッシュとビル・クリントンとバラク・オバマ」

「ブッシュが49で、クリントンは67、オバマは65」

「ビル・ゲイツとステイブ・ジョブズ」

「ゲイツが60で、ジョブズが64」

おかしくなって、水の入ったグラスを持ったまま、身体をゆすってゲラゲラ笑った。

「このゲーム、キリがないね。永遠に続けられる。じゃあ、レディー・ガガとマイケル・ジャクソン」

「その二人は、二人とも『心の偏差値』72」

「そうだな、じゃあ、最後に釈迦とイエス・キリストの『心の偏差値』は？」

「釈迦が68で、イエスが65」もえは、限りなく真面目な声で答えた。

「もえさんてさ、すごくシリアスに見えるけど、すさまじいユーモア・センスを持って  
るんだね」

「別にユーモアじゃない。でもね、いるじゃない？ 勉強の偏差値が高くて、『心の偏差  
値』が低い人」

「うん、いるね。とても、たくさん」

「たぶん、生きていくのが一番、楽なのは、そーゆー人たちなんだけど、わたしが一番、  
嫌いなのも、そーゆー人種なの」

「おれも」と、シンプルに言葉を返した。

「ノブオはものすごく嫌なヤツだと今でも思うけど、こういう話が通じるところが好きじゃあね」

それだけ言うと、もえは、ハサミで紙を切るようにスツパリ通話を切った。

しばらく携帯を見つめ、それからもえとの会話を思い出して、もう一度、声を出して笑った。こんなに、素直に笑ったのは、ずいぶん久しぶりのこと。それも、まさか、もえに笑わされるとは思わなかった。

人間と人間の付き合いって、不思議だな。

つくづく思った。そして、秋元康の『心の偏差値』を、この上もなくシリアスな真顔で「63」と答える、もえを心に思い浮かべながら、もえとの珍しく幸福な会話の余韻に、しばらく浸った。

★18

ノブ、みなみだよーん。

『輪るピングドラム』観てくれて、ありがとう。

そう、ピングドラム、最高！

選ばれないことは、死ぬこと。もー、超いいね！

ピングドラムのテーマでもあり、お決まりのセリフがあるんだけど。

「運命の果実を一緒に食べよう」

ついでに、

「選んでくれて、ありがとう」

って返すの。

「この「果実」って言えば「愛」なんだけど、このセリフ大好き。

愛って与えるものでも、奪うものでもなくて、分けるものなんだあって。

まさに「ありがとう」なんだよね。

分けてくれて、ありがとうって気持ち、忘れること(人)多いよね。

ありがとう、って気持ちも、選ばれなきゃ死ぬんだったってことも、実際に選ばれなかった人の方が事の重さに気付いているの。皮肉なの。

だから、せっかくだから。

私は、そういうこと忘れたくないなあって気付かされる、いい作品。

アニメって、やっぱりいいな。

『攻殻機動隊』も、最近、見直したい作品。

おやすみ。

PS

『残酷な天使のテーゼ』も、もちろんいいんだけどさ。『創聖のアクエリオン』で、アニメは最低だけど、歌はいいよー！

「1億と2千年あとも愛してる」って、夢だよね。ありえないけど、夢。そんなことって、本当に、リアルではありえないんだけど。

北野武な二人連れの男を店から追い出し、小林りのに接客され、渋谷区・松濤の家に帰って、もえと電話で話し、みなみのメールに一言「おやすみ」と返信。何だか、忙しい一日。

シャワーも浴びず、歯だけ磨いてシングル・ベッドの布団にもぐりこんだ瞬間にメールが着信した。一瞬、無視しようかと思ったが、眼を開けて携帯を手にする。緑色の着信の点滅。見ると、小林りのからのメッセージだった。

まだ、起きてる？

うん。

一言、返事を返す。

すぐ、来て。

顔をこすって、頭を覚醒させる。

りのちゃん、寝てないの？

わたし、寝ない人なの。寝ても3時間くらいで、すぐ目が覚める。  
電車、まだ動いてないけど、来られる？

行くことは出来る。

わたしに会いたい？

会いたい。

じゃあ、助けに来て。

本八幡の駅に着いたら、メールする。

そう送信すると、返事を待たずに外着に着替え、「ビアンキ」のキーをつかんで部屋を出た。

渋谷から千葉県にある総武線本八幡の駅までは、走行距離で24キロ。途中、荒川と江戸川を渡る。夜明け前の大きな川は、まるで地表から世界を支える巨大な黒い龍のように見えなくもない。気持ちの良い速度で「ビアンキ」を走らせ、1時間後には、以前、入った駅前のファミレスにいた。

30分、待たされて、小林リのがやって来る。

「助けに来たよ」言っていると、禁煙席のテーブルの脇に立ったまま「ホテルの部屋で話さない？」と、訊かれた。

「面倒くさいから、ここでいいよ」

言っていると、リのは、ちよつと不機嫌な顔をした後、何も言わず、私の正面に座った。

りの注文は、シーズン限定のスペシャル・ローズヒップ・ティー。私はドリンク・パ

ーを頼み、グラスに2杯、コーラを持って来た。

「なぜ、2杯？」

りのが訊くので、

「長くなりそうだから」

と、答える。

「うん、たぶん、長くなる」

りのは、下からのぞきこむように言う。

「いいよ、そのために来たんだから」コーラを一口飲み、言った。

「結論から言うと、その『神様』な女の子と縁を切って欲しい、というお願いがしたいのだけど。でも、そう考えるに至るまでの経緯を説明させて」

りのは、ローズヒップ・ティーの入ったカップを両の掌で包み、視線を落としたまま言う。黙って、彼女の言葉に耳を傾ける。りのは、おそろおそろ少しづつ、心のドアを開けるように話しはじめた。

「わたし、2年間付き合っていた彼氏がいたの。てか、彼氏と呼べる人は、その人しかいなかった。他の男の人と付き合ったこともないし、好きになったこともない」

彼女は、そう言うと、束の間、眼を上げて私を見つめ、再び、手の中のカップに視線を落とした。

「わたし、もともと人に『好き』って言えないヒトだったのね。すごい好きな人にも『好き』って素直に言えない。絶対に口が裂けても言えない。だから、彼氏に一度も『好き』って言えなかった。傷付いた時に『傷付いた』って言えないし、傷付いた時に泣くことも出来ない。彼氏に『おまえは強いヤツだから』って、よく言われたんだけど、違うの。強いんじゃない、弱いから言えないの。自分の気持ちを、どうしても素直に言葉にすることが出来なくて。」

それで、2年付き合っただけで別れる時、要するにフラれたんだけど。その時、彼氏に『おまえがオレのこと、どう思っているのか、結局、最後まで分からなかった』って言われて。何だろう？ 反省でもないし、後悔でもないし、その時の感情が一番近い言葉は『絶望』かな……。

もう、本当に、自分が嫌で嫌で、自己嫌悪のあまり、本気で死のうと思った。だって、その彼のこと、本気で好きだったから。絶対に失いたくないって、ずっと思っていたから」

りののは、そこで言葉を区切り、カップに口を付けると、大きなため息を吐いた。左手を伸ばして、りのの指に触れた。りのが指を絡めて来た。

私たちは、ファミレスの禁煙席のテーブルの上で、はじめて互いの身体にしっかりと触れ合った。

「だから」と、りのは私の眼を見て言った。

「もう、二度と同じ過ちを繰り返すのは止めようって心に誓ったの。思っていることは、ちゃんとやおうって。好きな人には『好き』ってやおうって。嫌なことは『嫌だ』ってやおうって。分かる？」

「分かる」

私が答えると、りのは続けた。

『家族』という女の人のことは受け入れることが出来る。『家族』というニュアンスは理解出来るし、あなたが誠実かどうかはともかく、マジメな人間であることは間違いないから、きつと、それは誤魔化しとかではなく、言う通り、彼女はあなたにとって『家族』なんだろうと思う。だから、彼女のことは別にいいの。それに率直に言って『家族』ならば、その気になれば奪い取る自信があるから。でも『神様』は違う。『神様』には、どうあがいても、わたしじゃ敵わない。なぜなら、わたしはただの『女』だから。だから『神様』とは縁を切って。もし、わたしを選ぶなら、もう二度と『神様』とはコンタクトしないで。なぜなら、あなたが好きだから。助けに来て、と言ったのは、そういう意味」

小林りのと指を絡めたまま、黙っていた。黙ったまま、つないだりのの指を見つめた。もし、本気で力を込めれば簡単に折れてしまいそうな細い指。その指を守りたい、と思った。

「いいよ」と、私は言った。

『神様』とは、もう二度とコンタクトしない。ただ、彼女は死ぬほどプライドの高い女の子だから。だから、彼女のプライドを傷付けるようなことはしたくない。絶対に。彼女には何も言わない。このままフェードアウトする。それでいい？」

「それでいい」

彼女は、一瞬、深く暗い海の底のような眼で私を見ると、ころっと表情を変えて、ディズニールランドのように明るく「ありがとう」と言った。

私は絡めていた指を離して、おどけて両手を挙げ「翻弄されています」と言った。

「そーゆーの、好きなクセに」と、りのが微笑む。

「まあね」と、私も微笑む。

「本当に、桜葉さんで性格悪い」りのが言い、私が「りのちゃんもね」と言うと、りのは楽しそうに声を出して笑った。

ファミレスを出たところで、身体の芯から突き上がって来るような衝動を抑えることが出来ず、右隣に立つりのの左手を思い切り握っていた。りのが、私の顔を黙って見上げる。りのの頬には朱が差していた。その時、私とりのは100%通じ合っていた。ペニスがありえないほどに固く充血していた。

「んん」

思わずうめく。それから、親と死別するような思いで、その手を離した。

「どうして、しないの？」

りのが、まるで子どものように素朴な口調で訊く。

「もし、今、そのラインを越えたら」言うと、りのが「うん」と答える。

『『家族』を取るか、りのちゃんを取るか、というシリアスなジャッジをせざるを得ない場所に追い込まれる」

「だろうね」

寒い地方の田舎の少女のように頬を赤らめていたりのの顔は、その瞬間、ビジネスで男を操る女の顔になっていた。

「いずれ、そういう状況になるとしても、今は、まだ、そのジャッジは先延ばしにしておきたい」

正直に言った。

「桜葉さんの、そういう正直なところ、わたし、好きだよ」

私は黙って、りのの顔を見下ろした。

「でも、言ったよね？ わたし。あなたを傷付けてあげる。嫌と言うほど。生まれてきたことを後悔するほど、深く傷付けてあげる。それは分かっているよね？」

「覚悟は出来てる」

言うと、りのは突然、私の右の耳をつまんで、自分の顔の前まで引っ張り下ろし、頬に触れるか触れないか、というほど、微かなキスをした。

「はじまり、はじまりー。さあ、一緒に地獄に行こう」

小林りのは楽しそうに言うと、再び、私の手を握った。



最近、メール来ないね。

わたしには何も求めていないとか言うわりに、ノブオのやってる事は真逆。

忘れられたくないの？

心配してほしいの？

それとも、自分に酔っているだけ？

全部、自分の都合だけでわたしの気持ちなんて完全無視。

結局、あなたは、同じ場所をぐるぐる回って、同じことを繰り返しているだけ。

あなたの中の「もえさん」がどうなろうと、わたしの知ったことじゃない。

「もえさん」がノブオの頭の中で死んでしまっても、わたしには関係ない。

じゃあね。わたしとの物語は、これで終わり。

もえの、そのメールを読んだ瞬間、自分の中で「もえ」の謎が、まるでミステリーの種明かしをされるように、すべて解けた。

なぜ、もえが自分にとって「永遠のミューズ」だったのか？ なぜ、もえを「神」として崇め、信仰にも似た祈りを捧げて来たのか？

大村直子と出会ったのは、大学に入学して、最初のオリエンテーション合宿の夜だった。山中湖のほとりのホテルで開かれていた上西大学文学部哲学科の、その親睦会ではじめて会った時、私は直子を「哲学科で2番目に可愛い子だな」と思った。1番可愛い子は、自己紹介の時に『JJ』のモデルをやっている」と言っていた。当時、 Teppan のモテ・サークルだった『ゴージャス』というテニス・サークルに所属し、10人男がいれば7人の好みまでは適合する、というタイプの、最大公約数的に男受けするタイプ。直子は、一見、地味で、妙な表現かもしれないが「玄人受け」するタイプと感じた。要するにシブい女の子。決して、派手ではないが、背が高く、姿勢が良く、品が良く、そして美人だった。

あの時、束の間、互いに惹かれるものを感じたのは、私の自意識過剰のせいではないと

思う。しかし、その後、私も彼女も別の相手と交際し、再び、彼女との距離が近づいたのは、大学卒業間際のことだった。

当時、付き合っていた彼女に内緒で、直子をデートに誘い、そして、直子は当時の彼氏に内緒で私の車に乗った。

春の三浦海岸を散歩して、彼女を家まで送った別れ際、クサイことを承知で、車のトランクに隠しておいたヒマワリの花束を、勇気を出して彼女に渡した。

直子は、しばらく無言でその、季節外れのヒマワリを眺めた後、言った。

「受け取れない。くれるなら、彼女と別れた後にして」

そして、その翌日から、私たちは正式に、自他公認の付き合いをはじめた。

付き合いはじめた当初、直子は完璧な女だった。家事全般苦手で、現実的な生活力は皆無だったけれど、美しく、気高く、知性に溢れ、私にとっては、まさに「女神」だった。

あまりにも人格的なギザギザが噛み合い過ぎるので、一度「おれたち、血のつながった兄弟みたいな感じがしないか」と訊いたら、彼女も「わたしも、そう思う」と即答したことを、よく覚えている。

しかし、それゆえに、というべきか、一度歯車が狂いはじめると、逆戻りがまったく不可能なほど加速度的に、私たちの関係は崩壊して行った。

相性は完璧に合っていた。しかし、私は後に知る。世界には、プラスに作用する男女の相性と、マイナスに作用する男女の相性があるのだということに。相性は100%合致していた。しかし、それは同時に100%、マイナスの相性だった。

何か、きっかけがあったわけではない。私が浮気したわけでもない。なのに、直子はしだいに怒りの衝動に支配されるようになり、やがて、その怒りは病的な領域に突入していった。彼女は、これと言った理由もなく、私の部屋の窓ガラスを叩き割り、カーテンを燃やし、壁に穴を開けて、食器を片っ端から叩き割った。

私は直子の感情の発露の原因がまったく理解出来ず、混乱しながらも、必死にあらゆる対応を試みた。

可能な限り、彼女の怒りを冷静に受け止め、慰め、ただひたすらに殴られてもみた。抱き締め、優しい言葉で包み、どこまでも追い掛け、わざと突き離してもみた。しかし、ダメだった。何をしても、どんな言葉を掛けても、彼女の怒りは収まることはなく、むしろ、異常な行動がエスカレートして行くばかりだった。

ある日、勇気を出して言った。「病院に行こう。一緒に行くから」と。自覚はあったの

だろう。彼女は、静かに「うん」と答えた。しかし、そこまでが限界だった。心の一番大事な部分が燃え尽き、ただ、粉舞う灰となり消えてしまった私は、ただ彼女の前に土下座し、言うしかなかった。

「別れてください」

と。その言葉を私が口にし、その現実「形」を与えた瞬間、私の前で一度も涙を見せたことのなかった直子は狂乱状態になり、家中にあった刃物をすべて抱えて、ユニットバスに閉じこもった。そして、叫んだ。

「死ぬ！ 死んでやる！」

と。

その後のことはよく覚えていない。私はいったん、すべてを清算し、断ち切るため、東京を離れ、山形の実家に戻った。

実家の自室に閉じこもり、ただひたすらに煙草をふかしながら考え続けた。直子の、あの怒りは、何だったのか？ と。

直子は、付き合っていた4年間、機嫌がいい時も悪い時も、一貫して、私に一度も「好き」と言わなかった。「ありがとう」も「ごめんなさい」も言わなかった。そのことの意味を10年考え続け、15年考え続け、その答えがようやく分かったのは、つい最近のことだ。1年前とか2年前とか、とにかく40歳を過ぎた後、そんな最近のこと。

もし、あの怒りに言葉を与えるのなら、たぶん、それは「嫉妬」とか「恐怖」という表現をするしかないのだろうと思う。でも「嫉妬」とか「恐怖」という言葉では、あの時の直子の感情や気持ちは数%しか表現出来ていないとも思う。では、大村直子の心の謎とは、何だったのか？

\*

世界中の人々が度胆を抜かすような壮大なマジックであれ、タネも仕掛けも分かっただけで、それは拍子抜けするくらい簡単な物語。

女性が怒り、感情を爆発させるのは、本当に大事な人に分かって欲しいから、愛されたかと思っただけのこと。そう。彼女は幼い子どものように、ただ、真っ直ぐに願っていただけなのだ。自分をちゃんと見て欲しい、と。そして私は純粹に彼女を守り、庇護すべきだったのだ。彼女の、まだ、もろく、傷付きやすく、繊細な自我を包む温かな衣

となつて。

\*

気付かない内に「直子」は、自分の人生で唯一最大の心の謎になっていた。そして、人間の心の謎がすべて解けた時、思い返しても仕方ないことと分かりつつ、一つの悔いが残った。その悔いが消えない限り、私は、きつと、生に執着を残し、天国へと辿りつくことは出来ない。その悔いとは、つまり、このような思いだった。

**もし、あの時、自分が直子よりも20歳年上だったなら、彼女をしっかりと受け止めることが出来たのに、と。**

そんな時に、もえは、まるで直子に代わって私に贖罪を与えるように、言いかえれば、私を天国へと導く天使のように、眼の前に現れた。そして、もえは、必然の流れとして、やがて、決して触れることの出来ない「神」となった。

★21

「サクラバが酒飲むなんて珍しいな。何年ぶりだ？」

「覚えてないっすね。記憶にある限り、飲んでない」

「やっぱ、飲まないのはアレか？ あんときの事件がきっかけか？」

「そうですね。自分が押えられなくなるのは、怖いです。心底、懲りました」

須藤さんはカップ酒を、私は缶ビールをあおる。

まだ20代でボクシングをはじめたばかりの頃、直子とビリヤードを突いていた時、7人からまれたことがあった。3人叩きのめしたけれど、残りの4人に半殺しにされた。が、先方は全員シラフ、私は酒に酔っており、運悪く、叩きのめした相手が眼底骨折。逆に警察に突き出されて、傷害罪で立件されそうになったことがあった。それ以来、私はどんな事情があっても、アルコールは一切、口にすることを止めた。

だが、久しぶりのビールは、うまかった。めちやくちや、うまかった。

「須藤さん、どうすか。六本木、赤坂方面は最近、平和ですか？」

53歳。身長165センチで筋肉のヨロイに覆われた身体に、緑色のMA-1を着た須藤さんは、赤らめた頬で、私のふった話を無視した。

「なんかあったのか？ サクラバ」

「いや、別に」

「でも、数十年ぶりに『飲む』だけの理由があるんだろう？」

「いや、何て言うか、気分とか流れとか、そういう類のものです」

缶に残ったビールを一息に飲み干す。

「なあ、サクラバ、馬のいない競馬場って、なんか『人生』みたいな感じ、しないか？」  
東京競馬場、誰もいないフジビュースタンド2階席に並んで座りながら、須藤さんの言葉について、しばし考える。

「最後には誰もいなくなる、って意味ですか」

須藤さんは赤い顔で私を見ると、パカッと笑った。

「アホー、おまえは相変わらずだな。あのな、サクラバ、何でも言葉にすりゃあいってもんじゃないんだよ。イメージだよ、イメージ。何か、そんな感じがするってこと。それだけだよ」

須藤さんの言葉に、肩から力を抜くように息を吐いた。

「ですね」

「おまえ、そんなんじゃ、仕事の方もまだまだらう」

「そうかもしれないです」

「おまえ、ちよっとおれの手首、つかんでみる。思いつきりつかんでいいぞ」

私は、少林寺拳法の技を使い、手首の関節を極めるつもりで須藤さんの手首を握った。

直後、手首の上の尺骨に激痛が走り、うめいて手を離れた。

「なんすか、今の」

「ツボ」

「は？」

「ツボ、軽く押しただけ。極めると、それだけでいいの」

「すごいっすね。『北斗の拳』のケンシロウみたいだ」

素直に尊敬のまなざしで、隣に座る「心取り」（しんとり）の大先輩を眺めた。

「バカヤロウ、せめてラオウと言ってくれよ」

そう言って、須藤さんはバシバシ私の背中を叩く。そして、続ける。

「おれな、ブラジルに渡ってた時、一回だけ、エリオ・グレイシーに会ったことあんだ」  
「はい」

「でな、訊いたことあるんだ。『人は何で生きてるんですか』って。エリオ、なんつったと思う？」

「分かりません」

『「ハア」って、一言」

「どういう意味ですか？」

「ポルトガル語で『ある』って意味だ」

黙って、須藤さんの言葉の続きを待った。

「それ以来、ずっとその言葉の意味を考えているんだけどな、全然、分かんねえ。分かんねえんだけどな、おれなりに思ったんだ。人間は何で生きてるのか？ 生き続けなくちゃならない意味や理由なんて、そもそもねーんだ。生きる理由を探すのが人生なんだ」

須藤さんは首をのけぞらせてカップ酒をあおり、正面の馬のいない馬場を見つめ、言った。

「まあ、でも、あれだな。こーゆー話は、オメーにはしない方がいいのかもしれないな。考えるな、感じる。それだけでいいんだよ。特に、おまえみたいなヤツは」

「はい」

「何も考えるな。考えるな、感じる。それが、おまえのための今日の教訓だ。また一つ、おれに会って、勉強になつたらう」

「はい」

私は笑った。自然と、顔の筋肉がゆるみ、穏やかな気持ちになる。須藤さんに会うと、いつもそうだ。

「飲みに行くか？」

須藤さんが訊く。

「行きましょう」

私は明るく答え、人気のない、日の暮れた競馬場の観覧席を立ち上がった。

★22

「断言は出来ないけど、それ、営業の可能性が大きいと思う」

深夜2時の路上。私は「ビアンキ」を押すのを止め、立ち止まった。

ジェットコースターに乗るように展開した、りのとの、このたった1ヶ月の関係のことを思い出していた。思い出していたというより、彼女との記憶が、脳内に秒速でフラッシュバックする。

「営業だと考えたことはあった？」

「だって、彼女には1円も使ってないんだぜ」

「だとしても。『育ての営業』というのもあるのよ」

「営業かもしれない、という可能性ももちろん忘れたことはないよ。でも、そこまで出来るのか？ あれがすべて、テクニカルに作った虚構の言葉だとしたら、どんな作家も太刀打ち出来ない才能と思う。真剣に」

「プロなら出来るのよ。なぜなら、そこまで来ると、本人も嘘か本当か、自分で分からないくなっているから」

「うん」

「ごめんね。もちろん、りのちゃんがノブに100%本気だという可能性もあると思うけど」

「みなみの携帯、本当に2万円あれば繋がるのか？」

「ごめんね。本当に、そんなつもりじゃなかったのだけど」

「いいよ、家族なんだから。出来ることはするし、出来ないことはしない」

「ありがとう。本当に、いつも」

「いや、その代わり、今度、おれが困っている時は助けて」

「もちろん。ねえ、りのちゃんとは、別れるの？」

「分からないけど、言ってもらって良かったと思う」

\*

私は、わずかに残る未練を胸の底に押し込め、「ビアンキ」にまたがって深夜の街の中へとペダルを踏んだ。角を曲がる時に振り返ると、みなみの姿はもうそこにはなかった。まるで、彼女までもが虚構の世界の住人であるかのように。

一気に加速しようと思いい切りペダルを踏み込んだ時、異次元から呼び止められるように「ノブウウウ」という女の声が微かに聴こえて来た。

自転車に急ブレーキをかけ、もう一度、耳を澄ます。

「ノブウウウウウウ」

間違いない。みなみの声だった。

あわてて、今来た道を引き返す。マンションの玄関の前で、みなみが泣いていた。

「ど、どうした？」

びっくりしてみなみの肩に手を伸ばした。みなみは、びくりと身体を震わせて、私の手を避けた。

「ごめん、ノブ」

「うん？」

「さっきのウソ」

「え？ さっきのつて？」

「りのちゃん、営業じゃないと思う。たぶん、ノブに本気だよ、それ」

「うん」

「嫉妬して言ったの。営業つて。認めたくなかった」

「いいよ、みなみ。それ以上、何も言わなくて」

「違うの、聞いて」

「うん」

みなみの眼は泣いているのに、なぜか赤くはなく、透明で、その涙は何かを浄化しているように見えた。

「寒くない？」

ダウンジャケットを脱いで貸そうとしたが、みなみは無言で制止して「聞いて」と、もう一度繰り返した。

「わたしは一度信じて心を許した人は絶対に裏切らないって、心に決めているの。たとえば自分が裏切られたとしても、自分からは絶対に裏切らない。絶対に、何があっても」

「うん」私は、息を大きく吸い込んだ。

「だから、わたしはノブを絶対に自分からは裏切らない。でも、絶対にノブとは結婚しない。たとえば、土下座されて1億円積まれても、ノブとは結婚しない。自分が不幸になるのが分かっているから」

「うん」

と、小さな声で返事をした。みなみの眼は、まるで悟りを開いた瞬間の釈尊のように清



らかだった。

「結局、わたしには元彼しかいないの。元彼は、わたしの全部を受け止めてくれた。弱いところも、だらしがないところも、取り乱したところも全部。もう、二度とそんな人が現れないことも分かっている。あの時に死んでおけば良かったって、本当に思う。でも、もう遅い」

「元彼とは、もう元には戻れないの？」そっと訊いた。

「彼、今、結婚して、子どもも二人いる。3歳と1歳の女の子。一度会った時、娘がおれのすべてだって言っていた。さすがに、そこに乗り込んで行って略奪を試みるほど狂っていない。残念ながら狂ってない。いっそ、狂いたい」

みなみの頬は、絶えることなく透明な涙で濡れていたが、彼女はそれを拭おうとはしなかった。

「ごめんね、ノブ。結局、自分の話、しちゃった。ノブ、大変な時なのに」

「おい、バカ言うな」

その時、自分の足が微かに震えていることに気付く。しばらくして、自分が怒りの感情に満たされていることを知った。しかし、それが、誰に対しての、何に対しての怒りなのか、どうしても分からなかった。

「ノブ、一つ、お願いがある」

「うん」

無意識に両の拳を、パンチを打ち込む時のように握りしめていた。

「もし、わたしから1週間連絡が途絶えたら、警察に通報して、うちに来てもらって。管理入室に合鍵があるから」

伸ばしかけた私の手を振り切るように、みなみは背を向けてマンションに駆け込む。

「みなみ！」

呼び止めた私を振り返り、みなみは無表情に言った。

「今日だけは、わたしの名前を呼ばないで」

そして、自動ドアが閉まり、みなみの姿は眼の前から消えた。

私は、その場を動けなかった。ずっと、ずっと、動けなかった。

ある意味では、みなみに見事に振られてから1週間後、暦はアイヌ語で「シユナン・チユプ」、12月に入っていた。  
あれ以来、みなみからは毎朝、

「…」

と、だけ書かれたメールが届く。「生きているよ」というメッセージだと理解してはいたが、あえて、心を鬼にして返信はしなかった。

\*

待ち合わせて出掛ける、最初のデートらしいデートをしたその日、りのは明らかに不機嫌だった。

「てかき、『公園オタク』って何？ そんなのあんの？ 聞いたことない」

それこそ、オタクの童貞でもない限り、りの声に苛立ちが含まれているのは誰でも分かる。

必死に弁明する。

「いや、別に『オタク』ってわけじゃないけど。飛鳥山（あすかやま）公園って、都内じやポイントの高い公園だよ。豚汁もコーヒーマも100円だし、紅葉も綺麗だし、広いし、ここみたいな博物館もあるし。ほら、ここにいれば寒くないだろ」

「わたし、別に、ハニワ見ても楽しくないんですけど」

りのに聴こえないようにため息をつくど、言った。

「別に展示してあるのは、ハニワでもクマの剥製でも関係ないよ。二人で座るベンチが一つあれば、それでいい。デートって、そういうもんだらう？」

「あのさ、桜葉さん」

「はい」

「そーゆーの、世間で何て言うか、知ってる？」

「いや」

『ケチ』っていうんだよ。ソーユーの単に。一般的に」

ちよっと早いクリスマス・プレゼントに貢いだ『オイラー・オイラー』の、フェイクではないフォックス・ファアの付いた純白のロングコートに、『ヒルベルト・マジック』のレザー・ブーツ。

女の子のいると、つい、ブランドに詳しくなってしまうのは、バブルの名残。そして、もえのようなデニムにTシャツ的なファッションを好むつもりでいたのだが、りのといると、自分が世間一般の中年と変わらず、いかにもガーリーな装いにトキメいてしまうことに気付き、どこか物悲しくなる。

りののような超ハイクラスな女の子を北区の公園に電車で連れて来て、博物館のベンチに座らせている自分は、確かに、ケチと言われればケチかもしれない。だが、スーパーに行けば2リットル198円で買えるのに、同じ中身が500ミリ・リットルしか入っていない自動販売機のペットボトルに150円払う金銭感覚が理解出来ない。なぜなら、そういう育てられ方をして来たから。

恐らくは、ロマンに満ちて船出した結婚生活が、そうした些細な価値観や習慣の齟齬(そご)をきっかけにして破綻して行くのであろうことは、40を過ぎればさすがに分かる。りののことは好きだ。正直に言えば、胸が苦しくて、切な過ぎて、夜もろくに眠れないほど惚れ切っている。でも、どう考えても、りのと結婚生活を送る自分の姿は、イメージ出来なかった。

「別に、毎回デートのたびに帝国ホテルでメシ食べさせろ、とは言わないけど……」  
むくれるりのに、思い切って訊いた。

「帰る?」

「うん、帰る」

即答だった。

帰り道、飛鳥山公園のモノレールに並んで座りながら、りのは言う。

「あのさ、桜葉さん。わたしは、あなたが好き。とても好き。お金のことで期待しないと言ったのも本当。わたしは別に、お金が欲しいわけでも、高価な貢ぎ物が欲しいわけでもないの。ただ、わたしみたいな人種の女は、男が自分のためにお金を使ってくれないと『わたしって、その程度の女なの?』って不安になっちゃうの。ある意味では、自分の存在意義というか自分の価値尺度をお金で計っているようなところがあるから」

「言っていることは、とても良く分かる」

私は、つと、モノレールの窓から、下の道路を走る都電を見下ろす。道路を走る電車を見たのはじめてかもしれない。何だか、それはとても庶民的な光景だった。

「じゃあ、わたしみたいな人種の女が、どうしてそういう思考回路になっちゃうか分かる？」

「それは分からない」素直に答えた。

りのは、私の右手を強く握る。りに身体を触れられると、なぜ、条件反射のように、こんなにも固く勃起してしまうのか、自分でもよく分からない。たぶん、それが重度の恋なのだろう。要するに、恋とは、脳内物質の化学反応の産物であり、それはつまり生理現象に他ならないから。

「あのね」

りのの眼を見る。この眼に恋をするな、という方が無理だ。

「自信がないのよ。わたしは、どうしても自分に自信を持つことが出来ない。わたしには何もない。誰もわたしのことなんか本気で好きにならない。所詮、この見た目と身体がすべてなんだって思っちゃうの。だから、自分のアイデンティティを支える拠り所が、自分に対して使われる『お金』しかないの」

私は恋人の眼をしっかりと見つめる。恋愛物質で充血した脳を必死でクールダウンしながら、つとめて落ち着いた口調で言う。

「金は他からもらつて。おれは、りのちゃんに金じゃなくて自信をあげたい。金に依拠しない自信を。なぜなら、あなたは素晴らしい女性だから。それを自分でちゃんと理解して欲しい」

「ちようだい」

りのは、生まれたての赤ん坊のような瞳で私を見る。

「お金に依拠しない自信。それ、わたしが今、一番欲しいものだから」

りのが、強くわたしの手を握る。

ダメだ。と、全面降伏する弱小軍隊の指揮官になった気分と思う。ダメだ。どうしようもない。りのが、好きで好きでたまらない。自分の心臓がグズグズに崩れていくことを自覚しながら、その時、地獄の底に落ちていくような快感を味わっていた。

「恋に溺れる」というのは、こういうことを言うのか……。わずかに残った冷静な脳細胞で考える。自分がすでに病的な状態に陥っている自覚はあった。

「心取り」の仕事だけは、何とかクールに務めているつもりではあった。しかし、もう、りのことしか考えられなくなっていた。

りのに会いたい。一瞬でも長くそばにいたい。その眼を見て言葉を交わしたい。唇を合わせたい。そして、何より、彼女を抱きたかった。りのとセックスがしたい。それも、身体中の細胞がすべて溶けて、流れだし、彼女の身体と溶け合い、一つになるまで愛し合いたいと強く願った。

携帯が手放せなくなった。常に彼女からの着信を気にして、着信点滅があれば、まさに狂喜乱舞した。そして、いけないと思いつつ、つい、彼女への想いを長々と書き連ね、送信していた。こんなメールを送信し続ければ、いずれ、りのも愛想を尽かし、自分を離れて行くのではないか、という恐怖を自覚しながら、それでもりのにメールを送ることを止められなかった。

最初のデート以来、りのは「忙しい」と言って、会ってくれなくなった。

一度、完全に断ったはずの酒に溺れるようになった。「心取り」の仕事が終わり、一人、家に帰るとイームズ・チェアに身体を沈めて、ひたすら酒を飲んだ。一晩でバーボンのボトル1本、空けてしまうことさえあった。再び、タバコを吸いはじめ、ボクシングのトレーニングに行かなくなった。1週間で体重が3キロ増えた。そして、ひたすらりのことだけを考え、気付くと彼女に長文のメールを書いていた。

このままではいけない。りのとの関係も含めて、いろいろなことがダメになってしまふ。そんな自覚も頭の片隅にはあったが、「心取り」の仕事においてもっとも重要な「自制心」というものを完全に失っていた。自分をコントロールすることが出来ない。

りの。

それが、私という存在のすべてだった。

\*

桜葉さん、気持ち嬉しいんだけど、もう、メールは控えてくれない？  
若干、うざいし、病的だよ。はっきり言って、気持ちが悪い。

私は、あわてて返信する。

だよね。すまん。ごめん。もう、メールするのは止める。アドレス、削除してもいい。  
ただ、会えないか？ 仕事以外の時間なら、いつでも、どこどこでも行く。どうしても会いたい。会いたくて、気が狂いそうだ。

しばらく、先方の迷うような空気が沈黙した携帯から感じられた。そして、着信。

12月23日に、お店に来てくれれば、会えると思う。クリスマスだし、アフターでしょうよ。

「アフターでしょうよ」

……?! その言葉の意味を凶りかねて、尋常ではない混乱に襲われた。つまり、率直に言って、それは、12月23日に店に行って金を使えば、りのとセックスが出来る、という事なのか？

「客として店で会わない」というのは、りのと私の間で引いた暗黙のラインのつもりでいた。でも、彼女は平気でそのラインを崩し。そして、りのと会えるなら、ましてセックスが出来るなら、どんなことでもするつもりでいる自分がいた。

認めるしかない。店で100万円使えばやらせてあげる、と言われれば、迷うことなく、その通りにするだろう。

ふと、現実に引き戻されるように、同じ12月23日に、みなみのバースデーに誘われていたことを思い出す。だが、みなみに対しての後ろめたさは感じながらも、みなみのバ

ーズデーに行く、という選択肢は、自分の中に存在しなかった。りのに会い、その身体を抱く。そのためならば、どんなことも犠牲に出来る。

世界に満ち溢れる醜さや悲しさや絶望のすべてを飲み込み、受け入れて微笑む、みなみの、聖母のような顔が一瞬、浮かんだが、私は、自分の中のみなみを自分の手で殺し、抹消した。そして、自分が本当に本当に最低の人間になったことを自覚しながら、もう、自分の意思では、りのへの激情に溺れて暴走する自分自身を、どうすることも出来なかった。

★25

12月23日木曜日、19…00ジャスト。はじめて銀座『クルーチェ』のドアを客としてくぐった。1年に一度も袖を通さないことさえある『ブルックス・ブラザーズ』のスーツを着て、きちんとタイを締めていた。手には抱えきれないほどのバラの花束を持って。以前、一度だけ小林りのに接客された、一番奥の死角になった孤島のような席に案内される。席に座ると、ひざまずいたボーイが水割りを作ってくれる。無言で、その酒を一口に飲み干す。

「こんばんは。お久しぶり」

眼の前に立つ、小林りのの美しく整った顔を見ただけで眼が潤み。そして、どうしようもないな、と自分に呆れながらも、本当に、もう、どうしようもないところまで落ちてしまった自分をどうすることも出来なかった。

小林りのは、右隣に座ると、太ももから肩までを私の身体の側面に密着させた。

「ラストまでいられる？ で、その後に、アフターでホテルに行こうよ」

小林りのがくわえた細いタバコに、自分のライターで火をつける。そして、自分もタバコをくわえ、火をつけて、煙を深く吸い込んだ。

「一応、今、口座に300万円は入ってる。それで足りるかな？」

小林りのは一瞬、身体を離し、呆れたような口調で言った。

「止めてよ、桜葉さん。わたし、あなたにそんな無理させる気なんて、全然ない。お店まで会いに来てくれただけで本当に嬉しい。カクテルをグラスに一杯、ごちそうしてくれればそれでいいよ」

「バカ言うなよ、クリスマスだろう？ せっかく、久しぶりに会えたんだ。『ピンドン』」

くらいは入れるよ」

「本当にいいの？」

「金って、こういう時のためにあるんだと思う」

「ありがとう、嬉しい。『ピンドン』が、じゃなくて。わたしのために、そういう風に思ってくれることが嬉しい」

「うん」

小林りの手を握る。りのも握り返してくる。

りが眼で合図して、ボーイにオーダーを告げた。

「ごめんね、なかなか会えなくて」

小林りのが、巢の中で親鳥の帰りを待つヒナ鳥のような眼で私を見る。

「忙しかったんだろう？ 仕方ないよ。おれの方こそ、無理ばっか言っでごめん」

「全然いいの。メールのことも、別に桜葉さんのことが嫌になったわけじゃなくて。ただ、忙しくて、なかなか返信出来ないから。そのことが何だか悪くて」

「あ、そうだ、これ」

私は左の脇に置いていた、直径60センチはある、密度の濃い、白いバラの花束をりに差し出す。

「きゃー！ 嬉しい。嬉し過ぎる。何で、わたしが白いバラが好きって分かったの？」

「りのちゃんのこととは、言われなくても大抵分かる」

「桜葉さんで、わたしのこと何でも分かっちゃうんだね。あなたは、やっぱりスペシャルだよ。桜葉さんみたいな人は他にいない。一生探しても、桜葉さんみたいな人とは、もう巡り合うことはないと思う」

りのの、それこそバラのように華やかに輝く笑顔を見て、何もいらなと思う。バカな男だ、と自分のことを思う。でも、バカだけど、少なくとも、おれは「客」じゃない。りのの本当の「恋人」だ。生涯をかけて見つけた最愛のお姫様を守り、尽くす。そのことその他に、本当の意味での男の仕事などない。

「りのちゃんのためならば、何でもする」無意識に口走っていた。

「だからいいんだってば、桜葉さん。わたしは、あなたに何も求めていない。あなたは、ただ、わたしのそばにいてくれればいいの。そばにいて、支えてくれれば、それでいいの」

りのは、そう言うと、スツと頭を、私の肩に乗せた。

りのの身体に腕を回し、そっと抱く。りのの身体が、処女のように、びくりと微かに震



える。

りの……。

愛おしさで胸が爆発しそうになる。

りの体温が上がり、頬が上気し、呼吸が微かに荒くなるのを感じる。

りのが、私の手を強く握る。

「りの」意味もなく彼女の名前を呼んだ。

「はい」

りのが、新婚初夜の新婦のような表情で私を見上げる。

一瞬、躊躇してから正直に言った。

「抱きたい」

「いいよ」

りのは、あっけなく答える。そして続ける。

「お店が終わった後、帝国ホテルで。閉店したらすぐ行くから、先に行って待っていて」

「分かった」

「うん」

りのが、身体の力を完全に抜いて、私に身を預けてくる。

「とりあえず、もう一本『ピンドン』入れよう」

「そんなに無理しなくて、いいのに」

「いいんだ。自分が、そうしたいだけだから」

「ありがとう」

呟くように言うと、りのは、生まれたばかりの女神のように純真な顔で微笑んだ。

深夜1…20の閉店までいて、会計は82万円。100万円までは使うつもりでいたのに、少し得したような気分になった。

愛車の「ビアンキ」を押して歩きながら、携帯から帝国ホテルに電話する。奇跡的に、インペリアルフロアのジュニアスイートが取れた。

りのとのセックス。

考えただけで足から力が抜け、その場に崩れ落ちてしまいそうだった。触れただけで射精する。間違いなく、そういうレベルまで勃起した自分の身体は、もう、ある意味では自分のものではなかった。私は、私の存在のすべては、りのものだった。

★26

帝国ホテルに向け、日比谷公園に隣接する歩道を自転車を押しながら歩いていた時、携帯に着信があった。りのかと思ったら、みなみだった。

何だよ、この大事な時に！

一瞬、覚えた理不尽な苛立ちに自己嫌悪を感じながら、メールを開く。

**たすけてろぽぎぶるばれた**

メールの文面は、それだけ。

束の間、頭の中が嵐に襲われるような混乱に陥る。数秒後、嵐が去ると、脳内は恋の酔いも酒の酔いも完全に醒め、霧が晴れたようにクリアに澄み渡っていた。コンマ数秒で、その暗号のような文字を解析する。

**助けて。六本木『ブルーバレンタイン』。**

みなみが、おれに助けを求めている。例え、本当に自殺するところまで追い込まれたとしても、一人ですべてを終わらせる覚悟で生きている、みなみが。つまり、このメールは、

みなみが正真正銘の危機にあることを意味する。

直後、私は「ピアノキ」にまたがり、六本木方面に向けて一気に加速した。

\*

六本木のシリア大使館そばにある無国籍レストラン『ブルーバレンタイン』は、みなみとはじめてデートした店。店内はそれほど広くはないが、上品な洞窟のように薄暗く、密会には打ってつけの店だった。

呼吸を整えながらドアを開けて、声を掛けてくるタイ人の店員を無視して、必死にみなみの姿を探す。

いない。

何度、探してもみなみの姿はない。電話を掛けようとして、ふと、奥の女子トイレを開けてみた。幸い中には誰もいない。三つ並んだ個室に静かに声を掛けてみる、

「みなみ、いるのか？」

突然、一番奥の個室のドアが勢いよく開いて、みなみが飛び出して来た。そして、私の胸に飛び込み、泣きながら身体を震わせた。

「どうした？」

強く彼女の身体を抱き締める。

「怖かった……」

みなみの声は、凍死しかけた登山家のように震えていた。

「犯されそうになった。赤い帽子、被った男」

「まだ、店の中にいるのか？」

「たぶん。わたしが出て来るのを待っている。逃げられなくて、それで」

「いい、分かった。おれが迎えに来るまで、カギ締めて待ってる。動くなよ」

「ノブ、あの人、たぶん、プロ。だから……」

「分かってる。いいから待ってる」

女子トイレを飛び出し、フロアに戻った。入口入って右、奥の席に、すぐに「赤い帽子の男」は見つかった。普通に品の良いカジュアルな装いの30代。体格は、それほど大き

くはない。ただ、醸し出す雰囲気から「場馴れ」した男であることは感じた。

「赤い帽子の男」のテーブルに行き、彼を見下ろす形で静かに訊いた。

「あんた、みなみの連れか」

「みなみ？」

男は慌てた風もなく、落ち着いた動作で私を見上げた。

「ああ、さくらのことか。キミは、さくらの何だ」

「『心取り』と言えば分かるか？」

その瞬間、「赤い帽子の男」は、心の底から楽しそうに私を見上げ言った。

「『心取り』ってことは、つまり、やっちゃっても誰も文句を言わない男だね」

「あんたをやっても、どこからも文句は来ないか？」

「やれるなら、やってもいいよ。誰も文句は言わない。キミが勝てるならね」

「出ようか」

私が言うと「赤い帽子の男」は、スタッフを呼び、手早くカードで会計を済ませて立ち上がった。

シリア大使館の裏には「レジディア六本木檜町公園」というマンションがあり、そのマンションの前は小さな公園になっている。ベンチと砂場とブランコが一つずつあるだけの小さな公園。だが、ボクシングのリング、二つ分のスペースは余裕であり、暗く、人気はない。

「ケンカ」するのに、これ以上はないロケーション。

1本だけ立つ街灯の明かりの下、3メートルほどの空間を空けて向き合うと「赤い帽子の男」は「これ、一応、使わせてもらうから」と落ち着いた口調で言っ、品の良いダブル・コートの内側から、刃渡り30センチほどのドスを取り出した。

私は、一度、鼻から息を吸い込み「構え」を変えた。

素手での格闘であれば、基本は脇を締めて、ガードは高めに上げる。だが、刃物の場合、それもチャチなバタフライ・ナイフなどではなく、本格的な刃物と対峙する場合は、特殊な構えを取る。

相手が自分と同等か、それ以上の場合は、肉を切らせて骨を断つしかない。

私は、須藤さんに教えてもらった通りに、左前半身に構え、左手をダランと下げたノーガード、右手を顔の前に高く出して拳を握った。

簡単な理屈だ。前に垂らした左腕で刃物を受けて、差し違える形で右ストレートを叩き込む。外せば後はない。勝負は一瞬で決まる。

両眼に全神経を集中し、敵の「気」の揺らぎを皮膚で探っていた時、ドスを構えていた「赤い帽子の男」が、妙に明るい口調で「おう、来たか」と声をあげた。思わず振り返ると、そこにいたのは、大男の外人だった。たぶん、2メートルはある。ロシア人？ 肩幅が広く、明らかに格闘慣れた空気を発散させていた。

私は、自分よりも上背のある相手と闘ったことがない。

一瞬、気落とされたようにひるんだ隙に、「赤い帽子の男」が突っ込んで来た。「あつ」と思ったが体勢が崩れていた。右の拳を放ったが、腰が入らない手打ちのパンチになってしまい、あっけなくかわされ、直後、右の脇腹に内臓が切り裂かれるような激痛が走った。ドスがめり込み、血が吹いていた。

左手で「赤い帽子の男」の鼻をつかみ、片手でハンドルを回すように、思い切りねじった。

「ぎゃああああ」

ゴキゴキと鼻の骨が折れる感触があり、「赤い帽子の男」の両の鼻の穴から鮮血が噴き出した。のけぞった敵の腹にボディ・フックを放ち、後ろに倒れた隙に、脇腹に刺さったドスを引き抜く。出血を押えながら、片手でドスを思い切り遠くへ投げ捨てる。

もちろん、武器を持っていた方が闘いに有利ではあるのだが、私は、武器を持つと、どうしても意識が武器に行ってしまう、うまく闘うことが出来なくなる。例え不利でも、素手の方が格闘はやりやすい。

「赤い帽子の男」は、鼻を押えて地面をのたうち回っていた。

振り返ると、ロシア人の大男が、ゆっくりと近づいて来る。

勝ち目がないことは100%、はっきりしていた。ここまで深手を負っては、逃げるのも無理だろう。元々、この仕事、いつどこで死ぬ覚悟も出来ている。せめて、一発、差し違えようと流血する脇腹を押えながら、右拳を顔の前上げた時だった。

「サクラバアーツ」

叫びながら公園の中に突っ込んで来た須藤さんに、ロシア人が叩き下ろすようなフルスイングのパンチを放つ。須藤さんは、ダッキングで沈み込み、その拳をかわすと、そのままロシア人の後ろに周り、その大男の尻の穴に思い切り指を突き込んだ。

「フギヤオウ！」

と、ロシア人が妙に甲高い叫び声を上げ、しゃがみ込む。すかさず、身長165センチの須藤さんは、2メートルのロシア人の身体を足でロックしたまま首を後ろから締め上げ、1分後には、その巨大なロシア人は見事に失神し、安眠するヒグマのように地面に丸くなっていた。

須藤さんは、そのまま動きを止めず、四つん這いで鼻を押え、うめいていた「赤い帽子の男」に近寄ると、スッと首に触れた。そのまま「赤い帽子の男」はうつぶせに寝たまま、微動だにしなくなった。

「死んだんですか？」

震える声で訊くと、須藤さんは、温泉から上がる時のように上気した顔で「殺さねーよ」と、明るく笑った。

公園のベンチで、須藤さんが私の背中のツボをいくつか押すと、まるで魔法をかけたように、脇腹の出血は止まった。

「応急処置だ。後で、ちゃんと病院行って縫ってもらえ。明日になれば傷はまた開く」  
須藤さんは、肩を貸してくれた。

「こいつらはこのままにして、おれたちは早く消えた方がいいな。歩きながら話そう」  
須藤さんの筋肉質の肩につかまりながら、シリア大使館方面に向けて歩きはじめた。

「あ、そうだ。須藤さん、ちょっと先にすみません」

言うと、スーツのポケットから携帯を取りだし、みなみに電話した。みなみは、すぐに電話に出た。

「もう、大丈夫。お店の前で待っていて。すぐに行く」言うと、彼女は「ありがとう」と、とても静かな声で返事をした。

『『クルーチェ』の小暮店長から連絡受けてな。おまえの様子、見てたんだ。分かっていると思うが、『心取り』が店の女の子に手を出して風紀になったら終わりだ。カイシヤの方には、おれから話、付けておくから、サクラバ、おまえ、消えろ』

須藤さんが穏やかな口調で言い、一言「分かりました」と答える。須藤さんが続ける。

「今、おれの弟子みたいな若いのがいて、まだ24歳だがスジがいい。渋谷と銀座は、そいつにやらせてみようかと思ってる。おまえは、安心して引退しろ」

「はっ」

しばらく歩くと『ブルーバレンタイン』の前で、みなみが小鹿のように、か弱げにたたずんでいた。

「じゃあな、おれはこれで消える。落ち着いたら連絡しろよ」

「はい。須藤さん、いろいろ、本当にありがとうございます」

「サクラバ」

須藤さんが、夜明けの太陽のようにパカッと笑った。

「はい」

「幸せになれよ」

パーン、と私の背中を引っ叩き、須藤さんは歩き去った。

みなみの前に立ち、そっと手を握る。

りの手を握ると身体に電流が走った。みなみの手を握ると、まるで母親の胎内に戻ったような安心感に包まれる。

「大丈夫？」

みなみが、これ以上ないほどシリアスな表情で、私の血まみれの身体に触れる。

「病院に行きたい。タクシーの中で話そう。話したいことがたくさんある」

「うん」と、みなみが言い、私の胸にそっと顔を埋めた。

★27

幸い傷はそれほど深い場所には達していなかったため、病院で処置をしてもらい、腹に包帯を巻いて、すぐに帰ることが出来た。医者に事情を訊かれたが、痴話喧嘩だと言ってごまかした。みなみが話を合わせてくれた。

愛車の「ビアンキ」は、ロックもせずに『ブルーバレンタイン』の前の路上に放置したまま、二人、タクシーで、みなみのマンションに向かった。信号待ちで停車したタクシーの後部座席で、みなみが言った。

「ごめんね、ノブ、本当に。言い訳になっちゃうけど、アフターに誘われた時は、普通のお客さんだと思ったの。いっぱいお金使ってくれたし。それで……」

「いいよ、みなみ。それ以上、何も言わなくて。そもそも、おれがみなみのバースデーに来ていれば、こんなことにはならなかったわけだし」

「だって、別に、ノブは、わたしのバースデーに来る義理なんて、そもそもないのよ」

「義理とか、そういう問題じゃなくて」

勇気を振り絞り、隣に座るみなみの左手に、そつと触れてみた。みなみの指が戸惑うように微かに揺れ。次の瞬間、わたしたちは、しっかりと手を握り合っていた。

「みなみ」

みなみの眼をしっかりと見つめ、はっきりとした声で言った。

「籍を入れよう」

みなみも私の眼を真っ直ぐに見た。その視線はまったくぶれない。

「ノブ」

「うん」

返事をする、みなみは急に顔の筋肉を緩め、優しく笑い、言った。

「わたしも、まったく同じことを考えていた」

タクシーを降り、みなみのマンションの部屋に入った。

都心の2LDKだし、まあ、高級マンションの部屋に入るだろう。室内は白で統一され、清潔、余計なものは何もない、シンプルな部屋。ただ、アニメのDVDが、壁の棚一面に収納され、私のよく知らないキャラクターのフィギュアが陳列されている。

とりあえず血まみれのスーツとワイシャツを脱ぎ、大き目のバスタオルを借りて、試合前のボクサーのように肩に掛けた。

「何か食べる？ わたしも今日、結局、何も食べてないから」

もし、自分に娘がいたとすれば、娘の部屋程度には勝手を知っているみなみの部屋で、気安くベッドに座りながら言う。

「うん、じゃあ、何か、テキトーに」

「うん、じゃあ、何かテキトーに作るね」

みなみは言っ、キッチンに消える。しばらくすると、油の跳ねる音とともに、食欲を強烈に刺激するガーリックの匂いが漂って来て、つい、叫んでいた。

「みなみー！ お腹、すいたー！」

「はいはい、今、出来ます」

数分後、みなみは、ブロッコリーとシーフードのガーリックソテーを盛った純白のプレートを持ってキッチンを出て来た。

「早く、食わせろ」



「はいはい」

みなみはプレートをダイニングテーブルに置き、急須で狭山茶を淹れてくれた。

「いただきます」

「召し上がれ」

何も言わずに食べた。めちやくちやうまかったが、めちやくちやうまいと言うのが面倒なほど腹が減っていたので、無言で平らげた。

「こーゆーの、やりたかったんだよねー」

と、みなみが言って、

「うん、おれも、こーゆーの、やりたかった」

と、私も言い、二人で笑い合った。

「ねえ、お父さん、そういうことでしょ」

「うん、みなみ、そういうこと。今、たぶん、同じこと考えてる」

まるで、実の父と娘のように、ダイニングテーブルを挟んで向き合うみなみは、この上もなくリラックスした表情で言う。

「結局、わたしは愛情貧乏で、父親のように無条件な愛情を注いでくれる人を求めている。ノブは、強いのに愛情を注ぐ対象を見つけられず、疑似娘を求めてさまよっていた。わたし、自分は他人に対して『Giver』のつもりでいたのだけど、ノブといる時だけ『Taker』でいられた。だから、一緒にいて、すごく楽だったのだと思う。本質的に、ノブは『Giver』で、わたしは『Taker』。まあ、単純に需要と供給が一致したという話だよね」

「うん。たぶん、実の親子よりも親子らしい親子になれると思う」

「もえちゃんではダメだったの？」

はは、と笑い、言った。

「彼女はめちやくちや察しのいい子だから。おれは何も言っていないのに一度言われたことがあるんだ。わたしが求めているのは、父親役ではなく、父親なんだって」

「あの子らしい……」

眼を細めて、みなみの顔を改めて見る。

「あの子らしいって、会ったことがあるのか？ みなみは、もえさんに」

「今、もえちゃん、どこにいるか知ってる？」

「いや、知らない。え？ 何で？ みなみは知っているのか」

「ベルギーに留学したよ、あの子」

「ベルギー？ 何？ どういうこと？」

みなみは、一度立ち上がり、キッチンに行ってワインのボトルを持って来た。

「飲む？ お父さん」

「いや、もう酒は飲まない。死ぬまで飲まない」

笑って言うと、彼女の手からボトルを取り、そのルビーのような色をした液体を娘のグラスに注いだ。

「ありがとう」と言って、みなみはワインを美味しくそうに飲む。そして言った。

「もえは、妹なの」

その瞬間、地球の自転が静止したかのように、脳と体が平衡感覚を失い、めまいがした。

もえが妹？ は？

「父親が違うから苗字は違うんだけどね。お母さんが同じなの」

言葉を失ったまま、ただ黙って、みなみの顔を見つめた。

「お父さん、一つ、お願いがある」

「……はい、何だろう。ごめん、おれ、今、若干混乱してるけど」

「まじめな話だから、ちゃんと聞いて」

「うん、もちろん」

「もえにメールしてあげて。毎日とは言わないけど、一言でもいいから」

「いや、おれがメールしたら迷惑だろうと思って」

「違うの。たぶん、返信は来ないと思うけど。でも、あの子はアテンションが欲しいの。わたしじゃない、誰か他人が『見ているよ、ちゃんと見ているよ』って、メッセージを送るだけで、あの子は救われるところが大きいと思うの。だからメールしてあげて。たまにでもいいから」

「送っていいなら喜んで毎日メールするよ。もえさんに語りかけるといのは、おれにとっては、神に祈りを捧げるようなものだから。返事なんかいらない」

「ありがとう」

みなみは、娘は、心の底から嬉しそうに微笑む。

「で、どうするの？ これから」みなみは言う。

「うん、それをこれから相談しよう」

「あ、その前に」

みなみは、立ち上がると棚の前に行き、しばし、上げた指をさまよわせた後、一本のDVDを抜き取った。

「まず、一緒に観たいアニメがあるの」

「何て言うアニメ？」

「たぶん、知らないと思うけど、今敏監督の『千年女優』。いつか、ノブと一緒に観たいって、ずっと思っていたの」

「いいよ。どんな内容？」

「『千年女優』のキャッチコピーはね。『その愛は狂気にも似ている』って言うの。ねえ、わたしたちって狂っていると思う？」

「もしかしたらね」

私は、手元にあったリモコンで、DVDプレイヤーのスイッチを入れた。

★28

東京都台東区役所で、正式に養子縁組の手続きを済ませた私とみなみは、2013年の正月、沖縄にいた。

1時間車を走らせれば、ボクシング・ジムはあるが、とりあえず周りにはなーんにもない、小さな古民家の前の海辺に並んで座る。

尻の下の砂は砂丘の砂ようにサラサラと乾いていて、早朝4…00の風は、皮膚に鳥肌を立てるほどには冷たい。でも、タフなサーファーならば、ウェットスーツなしで海に入れるくらいの水温。

水平線は、グレーの厚い雲がたき火で燃やされるように濃いオレンジ色に染まっている。東京では決して見ることの出来ない、複雑な空の色。海の色、波の音、潮の混じる風、空気が、匂い、温度、そして自然。

沖縄、と思う。

「わたし、あきらめることに慣れてきたから」

隣で両膝を抱えて座るみなみが、ぽつりと言う。

「明日は、ちゃんと明日の風が吹くんだね」

「ちゃんと生きている人には、明日の風は、ちゃんと吹く。ちゃんと生きてない人には吹かない」

「うーん」

みなみは、誰もいない砂浜で、腕を組んで、思い切り伸びをする。私は訊く。

「本当にここでもいいの？ 山形の実家に戻ってもいいんだよ」

みなみは答える。

「東北の農家の娘よりも、沖繩の漁師の娘の方がいい。でも、何だっていいのよ。だって、仕方ないじゃない。他に選択肢はなかったんだから。わたしはあなたの、あなたはわたしの『アダムの器』になるしかなかったのよ。『魂の入れ物』に。例え、わたしが望んだとしても、あなたには他に何も出来ないことが、わたしには分かっているから」

込み上げる涙をこらえて、あえて、間を置かずに答えた。

「食っていけるかどうかは、分からないよ」

言うと、みなみは湿度のない、カラっとした笑みを浮かべて言う。

「本気で食いつぶぐれたら、二人で親子漫才でもやろう」

「そだね、それもいいかも」

「大丈夫だよ、お父さん。明日は明日の風が吹く。それより、お父さん、早く、お嫁さん見つけなきゃ」

みなみの肩をそっと抱いた。

「お嫁さんはいらない。お父さんは、娘が一人いれば、それで十分だ」

\*

その夜、海辺の古民家の自室で、PCのメールをチェックしていたら、小林りのからメールが来ていた。

**桜葉さん、小林りりのです。ごんごちん。**

たぶん、携帯メールでは送受信不可能なほど長くなってしまおうと思うので、以前、教えて頂いたこちらのPCのアドレスに送信します。

いずれ、事情をすべてお話ししようと思っていたのに、あなたは突然、姿を消してしまったから。

今だから信じてもらえると思うけど、わたしはあなたのが本気で好きでした。死ぬほど傷つけてあげる、生まれてきたことを後悔するほど傷つけてあげる、と言ったけど、本当は自分の方が傷つくんじゃないかって、怖くて怖くてたまらなかった。

まあ、でも、水商売の女の怖さを82万円で知って、夜遊びに懲りたなら、安い授業料ですよ。ね。そう思って、許して下さい。

わたしは結局、ああいう形であなたを突き放し、縁を切ってもらっしかなかったんです。

わたしには、あなたの他に、もう一人、男がいました。「山口」という男です。

高校1年生の時から知り合いで、ものすごく嫌な奴ですが、会社を10個経営している金持ち。

そう、まあ、はっきり言えば、そういう関係の男です。

わたし、高校の時から、可愛かったし、モテたからね。

うちは、わたしが高校に入学する、ちょうどその頃、お父さんが起業に失敗して破産しました。だから、「山口」が、わたしの家族を丸ごと面倒をみてくれていたんです。

お父さんもお母さんも、「山口」とわたしの関係のことは知っていたけど、どうすることも出来なかった。物理的に、借金まみれで、どうすることも出来なかった。

まあ、それで、法律的に許されるようになって、すぐに、わたしは夜の世界で働きはじめました。

自力でも、かなり稼げたけど、でも、やはり、「山口」の力あってこそ、という部分は大きく。結局、わたしたち家族は「山口」の庇護と支配を抜け出すことは出来なかった。

「山口」は、まだ精神的に幼かったわたしに刷り込みを行った。

「おまえは、見た目だけが取り柄の、バカでアホな中身のない女だ。おまえなんか、何の生きている価値もない」

毎日、毎日、そんなことを言われ続け、わたしは、その言葉を、そのまま信じるようになった。

「そう、わたしなんて、結局、見た目がすべてで、生きている価値なんて、まったくない女なんだ」  
っつ。

ある意味では、身体と同じように、精神もレイプされ続けていたのだと思う。

何度も自殺を試みたけど、結局、死ぬことは出来なかった。

だから、桜葉さんと会った時に、わたしのある部分は、すくく救済されたの。

桜葉さんは、一人の人間として、わたしの価値を認め、受け止めてくれた。そのことが、すくく嬉しかった。

あなたは、いつか言ってくれたことがあったでしょう？

「りのちゃんが、ブスの方がむしろ、おれは良かった」って。

桜葉さんの言葉だから、口説き文句の綺麗事じゃなくて、本心だったって信じられる。

「顔や身体と恋愛するわけじゃないから」という、「心フェチ」のあなたの言葉をわたしは信じる。

そして、この顔と身体にしか存在意義を認めてもらうことの出来なかったわたしは、桜葉さんの言葉に、文字通り、救われたのよ。

ああ、わたし、生きていていいんだって。すごく思った。

桜葉さんからメールもらって、実は、何度も泣いていた。

生きているのがつらく、しんどくなるたび、桜葉さんからもらったメールの言葉を、何度も何度も読み返した。

でもね、「共依存」って言葉があるでしょっ？

最近、分かったの。「山口」は、ひたすらわたしのことを傷付け、踏みにじるだけの存在だけど、あの男は、わたしが好きで好きでたまらないんだってことが。そして、実は、わたし自身も「山口」に踏みにじられることによってしか、自分の存在意義を見いだせないんだってことが。

近々、正式に「山口」と結婚します。

分かってくれなくてもいいんです。ただ、桜葉さんには、きちんと伝えておきたかった。たとえ、伝わらなくても、伝える努力だけはしておきたかった。

ありがとね、桜葉さん。

あなたと過ごした、たった2ヶ月の記憶は、陳腐な表現だけど、わたしの「宝物」です。わたしは、あなたとの思い出を胸に、支えにして、これからの人生を生きていきます。

愛してくれて、ありがとっ。

でも、あなたは、どれほどわたしのことが好きだったとしても、人生を添い遂げる覚悟はなかったでしょう？ そのことが、正直に言えば、ちょっとだけ悲しかった。

さようなら。もう、二度とお会いすることはないと思いますが、どうか元気でいてください。

もう、絶対に水商売の女に手を出してはダメですよ！

小林りの。

★29

小林りのから届いた、その長い長い手紙を読み、少なくとも、自分にとっての彼女の存在の意味を、はじめて理解出来たような気がした。

私は、女性について一番大事なことを、いつも一番最後、取り返しがつかなくなっただけから気付く。でも、仕方ない。男はバカだから。男の脳は、本質的に14歳で成長を止める。

**男は理性について女の倍、賢いが、男は感情について女の倍、愚かだ。**

というのが、この1年で学んだ自分なりの教訓。いつか、須藤さんに教えてあげよう。須藤さんは、たぶん、笑って、こう言うだろうけれど。

「バカヤロウ、そんなことは生まれた時から、おれは知ってるよ」と。

今、思う。彼女は、本質的には身分違いの「姫」だったのだ、と。私はただ、まぶしく見上げていただけなのかも知れない。自分が、彼女と同じステージに立つことが出来ないことを承知の上で。

彼女が、その生育環境と抱えるトラブルから、本物の「姫」の如く、高貴さと幼さを併せ持った存在として育って来たことは、もちろん、彼女自身の責任ではないし、だからこそ「姫」としての彼女の心にかかっている、たくさんのバンドを、少し緩めてあげたかった。彼女に人の心の優しさというものを知って欲しいと強く願い、彼女の心を守ってあげたかった。

「姫」は悪い王様のものになった。でも、私は「姫」の付き人にはなれたが、ナイトにはなれない。世の中には、出来ることと出来ないことがある。それは、純粹にあきらめるしかない種類の事。例え、それが、どれほど悲しいことであれ。

私には、ただ願うことしか出来ない。彼女の、この先の人生が、少しでも愛を含んだものであることを。



「ただちやー、ご飯、出来たよー」と、娘の呼ぶ声がする。

「ほーい、今、行きまーす」返事をしながら立ち上がり、思う。

みなみについては、何も心配していない。みなみについては、決して手遅れになることはない。大丈夫。なぜなら、みなみは「姫」ではなく「娘」だから。

立ち上がって、食卓へ向けて歩き出した時、足がしびれて、ちよつとよろけた。年を取ったな、と思い、一人、笑った。

★30

「娘さんは、どうしてるんだ？」トレーナーの高橋さんに訊かれ「今、サトウキビ畑にバイトに行ってます」と答える。「中上さんのトコ？」重ねて訊かれ、「はい」と、返事をす

る。

高橋トレーナーは何度か無言でうなづく、コロつと話を変えた。

「ノブさん、あんた、スジはめつぼういいし、基本的には教えることは何もないよ」

高橋トレーナーが言い、私は、もう一度「はい」と答える。

『めんそーれ・シーサイド・ジム』の道路に面した窓際のベンチに座り、頭から噴き出す汗をガシガシと乱暴に拭う。窓からは、沖繩のストレートな日差しが降り注ぎ、裸の上半身が、焼かれるように暑い。

「ただな」と高橋さんが続ける。彼の言葉に耳を傾ける。

「ノブさんのはケンカのパンチだ。ストリートファイトで使うならそれでもいいが、リングで闘うなら、グローブを付けて打つパンチを、ちゃんと練習しなくちゃダメだ」

「はい」

「ノブさん、あんた、これから、本気でボクシングをやるつもりはあるか？」

「身体さえ動けば、70歳になっても続けていたいと思ってます」

「今、いくつだったか」

「44です」

「ふん」と、うなずき、高橋トレーナーは黙って、私の身体を眺めた。

「ノブさん、『MAF』って知ってるか？」

『MAF』？ いや、知りません。何ですか？」

「知っての通り、プロのリングで試合が出来るのは37歳までだ。だが、通称『MAF』、『ミドル・エイジ・ファイト』と言う日本最強の中年を決めるトーナメント・マッチがある。ヘッドギアを付けての勝負だが、元日本ランカーなんかも出場して来るから、はつきり言ってレベルは高い。秋に後楽園ホールで、全クラスのタイトル・マッチをやるんだが、沖縄の地区予選が来月から始まる。出てみるか？」

「はい！」

私は、クリスマス・プレゼントを開けた瞬間の子どものように、はしゃいで返事をしていた。

「じゃあ、ロードワークに行つて来い。本気で勝つつもりなら、これから、1日20キロは走つてもらうぞ」

そう言うと、高橋トレーナーは、両手にはめたミットを「パーン」と叩き合わせた。私は、その音に励まされるように、ランニング・シューズを履き、ジムを飛び出した。

2時間トレーニングしてから、アップダウンのキツイ沖縄の田舎道を20キロ走り、さすがに指を動かすのもしんどいほど、クタクタに疲れた。だが「心取り」の仕事をしていた頃の、心身を削り、すり減らすような疲労感とは違う。もっと、純粹に肉体的で健全な、動物としての疲労。

ジムの前の自動販売機で、500ミリ・リットル、150円のスポーツドリンクを買い、一息で飲み干す。それから、沖縄に来てから購入した、愛車のオンボロ・ピックアップトラックに寄りかかりながら、携帯を取りだし、もえにメールを打った。

もえさん、二んには。

ベルギーは今日もワッフルが美味しいですか？

私は今日も、2時間トレーニングして、20キロ走りました。

もえさんがそばにいたら、きっと「バカみたい」と言うのでしょっぴつね。

ねえ、もえさん。

おれ、今になって分かるよ。

もえさんが、おれの何に対して苛立っていたのか。

もえさんの言う通り、確かにおれは、同じ場所をぐるぐる回って同じことを繰り返していただけなのだと思う。

そのことに無自覚であった」ことで、

どれほど、あなたを深く傷付けていたのか、今になって、分かる。でも、信じて欲しい。

もえさんは、おれの人生において、

やはり、唯一絶対の「神」のような存在だった。

あなたが、もし、道に惑い、落ちぶれ、醜い屍となったとしても、そのことは変わらない。

おれは、あなたに永遠に祈りを捧げ続ける。

サンドバッグの前から、世界のどこかにいる、あなたに向けて。

『神様』への祈りを送信すると、そのまま携帯で娘に電話する。

「みなみ？」

「何？ だだちゃ」

「おれ、これから家戻るから、何か夕食作って待ってるよ。何か、食べたいもの、ある？」

「別に何でもいいよ」

「じゃあ、今朝、獲ったタコ、カルパッチョにしようかと思うんだけど」

「いいね、カルパッチョ、最高。食べたい」

「じゃあね」

「じゃあね。あ、そうだ。ねえ、だだちゃ」

「うん？」

「あのさ、お互い、死ぬ時は、心のバインドを全部、外した状態で死にたいね」

「そうだね」

明るく答えて、通話を切った。オンボロのピックアップ・トラックの運転席に座り、エンジンがかかる。暖気しながら、心地よく疲れ切った身体をシートに預ける。

窓からは、沖縄の、どこまでもポジティブな青い空が見える。

「考えるな、感じる」

と、いつか須藤さんは、誰もいない競馬場で言った。今、その言葉の意味が分かる。

「考えるな、感じる」

その通りだと思う。考える必要なんてない。感じるだけでいいんだ。須藤さんは、その時、こうも言った。

「何でも言葉に置き換える必要はないんだ」

とも。

別に無理矢理、言葉に置き換えるつもりは、まったくもないのだけど。その時、自分の気持ちは、パズルの最後のピースをはめるように「ストーン」と、収まるべき場所に落ちていた。私は、その気持ちを、すごくシンプルな言葉で表現することが出来る。

「幸福」。

それ以上でも、以下でもない。自分の中にあるのは、ただ、その言葉だけ。

私はハンドルを握ると、家族と暮らす「家」に向けて、ゆつくりとペダルを踏み込んだ。

★  
★  
★

あれから二年半が経ち、思う。おれが、あなたたちから学んだのは「自分が無力である」という事実なのだ、ということ。

正直に告白すれば、もう一度、あなたたちに会いたい。会って、きちんと話がしたい。

誤解していたこともあったし、誤解されている部分もあった。今ならば分かることも多くある。そうした物事のすべてを解き明かして、心と心、縁と縁を、きちんと繋ぎ直したい。人と人として。

たぶん、男とか女とか恋人とか夫婦とか親子とか、そんなカタチはどうでも良くて。人間が人間を愛し、愛し続けることに、理由もルールも言い訳も必要ないから。

あなたたちが、心から笑える日が来ることを祈っています。

どうか元気で居て下さい。例え、あなたたちが、おばさんになっても、おばあさんになっても、きっと、ずっと、愛は消えない。

2015年8月

鈴木剛介

『ハートカッター(小説編)』了 ……以下、『ハートメイカー(エッセイ編)』に続く。

『Heart Cutter』 by Gosuke Suzuki/2012.11.19~12.24/End. 最終改訂 2015/08/12

(400字詰原稿用紙換算:250枚)

gosuke@gps1999.com www.gps1999.com